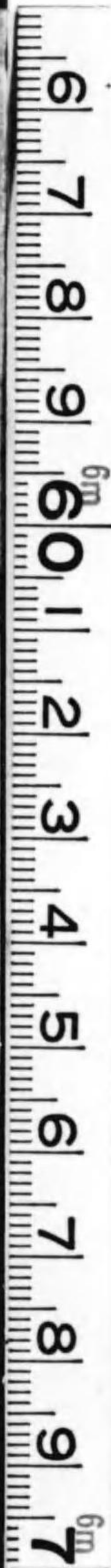


明治天皇御製讀本

特 232

86



始



特232
86



京都府立桃山中學校長田中常憲謹著

明治天皇御製讀本

東京
大阪
寶文館藏版



Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including the title '明治天皇御製讀本' and the publisher '寶文館'.

序

明治天皇御製は、教育勅語と相表裏し、わが國千古不磨の一大經典であり、わが國民最高の指導原理である。故に我々國民たるものは、日夕之を奉誦服膺して、以て之が實行に努めねばならぬ。聖旨に答へ國恩に報ゆる所以の道は、之を措いて外に無いのである。

昭和五年十月三十日は、教育勅語御渙發第四十周年に當る。本書はこの四十周年記念として、吾等が後繼者たる全國中等學校男女生徒諸君、及び青年諸君に、日本建國の由來と、肇國の大理想と、及び天皇中心の活動、日本精神の如何に尊きものなるか等を明治天皇の御製を通じて、一層明確に悉知せしめ、以てわが國體の尊嚴なる所以を明かにすると同時に、若き人々の純眞な精神を倍々啓培振作して、之が實行に一段の努力を望みたいと思ふ一念から、之を謹著したものである。されば、平素座右に供へて自習自學の伴侶とし、或は修身科副讀本として各種學校にて採用を願ひ、多少にても國家社會に裨補する所があらば、著者の本懐之に過ぐる

ものは無い。

右様の次第であるから、註解もわざと繁を避け、要を撮み、専ら生徒及び青年諸君の自發に俟つ如くし、思想上重要性を帯びたもの、又は特に注意を要するものは、其の心して謹解を施してある。冀くは、奉誦三四、深き御聖旨の程を味つて戴きたい。

書中の題目は、便宜上、著者が類別して設けたものが大部分である。そは、學習上又は修身科に本書を併用せらるゝ場合、引用教授に便せんが爲である。

書中の御製は宮内省藏版で、文部省發行の御集から採録したものであるが、その他の書から採つたのも、四五首ある。

昭和五年十月三十日、教育勅語御渙發第四十周年記念の日

京都桃山御陵下において

田中常憲謹識

目次

緒言	一	仁慈	二首
國	六首	世界平和	五首
三種神器	二首	奉公	四首
道	四首	務	三首
敬神崇祖	六首	修徳	十二首
誠	四首	反省	三首
日本魂	六首	努力	五首
帝國憲法	二首	親子兄弟	五首
御仁政	二十一首	友	二首
日露の役に詠み給へる	一十五首	敬老	二首
心	八首	幼兒	三首
		生物愛護	六首
		教育	七首
			八首

學問	九首
學習	三首
人材登庸	二首
大臣以下の人々へ	五首
家長	二首
學生	三首
卒業生	二首
海外發展	二首
故郷を歌ひ給へる	七首
花さりゆゝ	十首
	一九〇九

明治天皇御製讀本

世界に神國あり、日本こいふ。日本に神子あり、明治天皇こ申し奉る。明治天皇は、維れ文維れ武、さながらなる現神にておはしまし、盛徳大業、中外其の比を見ず。實に世界人類中の大偉人、世界帝王中の大帝王にてましまし、同時に天下稀に觀るの大歌聖にてましました。

明治天皇の御治世、わづかに四十有五年。而も東洋の一小帝國たる日本が、忽ち一躍して世界列強の主班に列したのは、實に世界の奇蹟であり、神仙傳的事實である。而して 明治天皇は、是れ則ち地上に於ける神人とも、又人間化せる神とも申し奉るべきであるは、當年某外國新聞誄辭の一節であつたが、まことに知言である。

明治天皇の國歌に於かせらるゝ御境地は、天衣無縫とも申し奉るべく、天真にして率直、平易

にして深遠、毫も斧鑿の痕がなく、處に隨ひ、折に觸れ、言語則ち章を爲し、咳唾忽ち珠を成すといふ趣があり、駐輦三日(結城に於ける)の間に、忽ち二百五十首の大作をものし給ひ、新年の數日(四十一年)に、一氣五百餘首を呵成し給ひしが如き、眞に天馬空を行くの概がある。而して前後詠み出で給へる御製の數、十萬餘首を算ふるに漏れ承るに及んでは、只々驚嘆の外は無い。而して是等の大創作は、孔子の所謂、行つて餘あらば以て文を學ぶ。こいふ御態度を以て、非常な御繁多な御政務の隙々に、おのづこ詠み出で給うた詠歎の聲であるを拜承する。

思ふこころありのまに／＼つらぬるがいまなき世のなぐさみにして

御政務の外、何等御道樂もても無き 天皇におかせられては、和歌は、實に唯一無二の慰であり、たのしみ 娛であらせられたのである。

而も、其の慰であり、娛であらせられた和歌の御製が、單に彼の花鳥風月を詠するの類でなく、其の多くは、實に國を思ひ、道を思ひ、世を思ひ、民を思ひ給ふ經世濟民の御聲であり、修身・齊家・治國・平天下の御訓であるに至つては、流石帝王の御詠にして、景仰讚嘆の外無いのであるが、而も 天皇におかせられては、強ひてかく詠み出で給へるにあらずして、天皇の御性格を御教養が、知らず識らず、此に至らしめたものであるを拜察するのである。

法に徳に、主・師・親の最高頂に立たせ給へる日本の天皇は、明治天皇に於て、吾等は生ける實體を見た。實に 明治天皇は、吾等の主であらせられたと同時に、眞の師であり親であらせられた。眞の師であり親であらせられたと同時に、大慈大悲の活如來であり、博愛仁慈の現神にておはせられた。そは 天皇御在位四十五年の歴史は、之を證明して餘あるのみならず、以下ものする所の御製を拜誦して、何人も首領するこころが出来るのである。

是に於てか、吾等は敢て斷言する。明治天皇の和歌の御製は、彼の教育勅語と相並んで、實に日本國民の須臾も離るべからざる一大聖訓であり、一大經典である。若し教育に關する勅語を太陽とすれば、和歌の御製は、即ち月であらねばならぬ。教育勅語と御製とは、互に相表裏し、互に相經緯し、以て長へに我が國民を教化し、世界人類を指導する一大指針であり、同時に人間界萬古不磨の大文字である。

著者は、この千古不磨の經典たる教育勅語と、代表的御製十首とを謹刻せる世界最高の一大記念塔を、御渙發五十周年を期して、明治神宮の外苑に建立し、わが國體の尊と、國民道德の美を普く中外に昭示し、後世子孫をして萬古に矜式する所あらしむると同時に、日本の文化を廣く世界に紹介する所あらんことを欲するや、實に切なるものがある。著者はわが八千萬國民の赤

心、必ずや此の擧を大成すべきことを堅く信じて疑はぬ。切に大方諸彦の一考を望む。

四

記念塔建設に就いての私案

- 一、塔の高さは、なるべく世界第一とすること。佛のエツフェル塔三〇〇米。それより高きこと一〇米のものが、最近米國に出來た。ワシントン記念塔が一六九米。クフ王金字塔一三八米。米國の自由塔が一七米。日本で一番高いのが尾張の佐々美無電塔二五〇米。帝國議事堂の塔は六五米。京都東寺の塔は、五七米である。
- 二、塔の表面には、金字もて教育勅語を謹刻す。一字の大きさ六尺平方位、裏面には代表的御製十首を謹刻す。又別に臺部に教育勅語の漢譯と英譯とを謹刻す。
- 三、一切の設計は、當代一流の専門家に委嘱し、謹刻の書も、亦昭和の代表的ものたること。
- 四、經費は、設計の如何によつて決定すべし。但し全國の總人口八千三百萬人及び全國の學校就學生(幼稚園より大學に至るまで)一千百五十五萬六千百人に對し、一人當り金五錢の贈金をなさしめ、此の總金額約五百萬圓弱を親金とし、餘は全國的に寄附金を募集すること。
- 五、役員は、日本の代表的人物東郷元帥を建設委員長に、民政兩黨首を副委員長に、府縣知事其他を委員に、而して之が總裁を 宮殿下に御願して之が大成を期すること。

國

六首

天つ神定めたまひし國なればわが國ながら尊とかりけり

「天つ神」は、造化の三神を始め奉り、伊弉諾尊、伊弉册尊、及び天照大御神なきを廣く指し給ひしものご拜察する。

一首の意は、我が大祖先であらせらるゝ天つ神の御力によりて、國土を經營し統一し、君臣一體・忠孝一本の國性を樹立し、以て萬邦無比なる國體の基礎を定め給ひ、遼たり三千年、今や我が國は世界列強の班に列し、國光これ揚り、國威これ隆々たるの有様である。此の如く立派な國柄は、世界に只一つあつて二つご無い。我が國ながら褒むるはいかゞご思へき、實に尊い國である。この御言葉である。

謹んで按ずるに、太古、わが國土がまだ渾沌として天地の區別も分らない時に、始めて此の土に成りました神様が、天御中主神・高御産靈神・神産靈神の三柱の神様であつた。之を造化の三

五

神に申し奉る。それから天神七代を経て、伊弉諾尊・伊弉册尊の御代となり、ここに始めて高御産靈神・神産靈神の詔もちて、國土經營の大任を右の二神に御命じになつた。ここに伊弉諾尊・伊弉册尊の二神は、淡路の自凝島に天降りまし、皇居八尋殿を造り、ここを根據地として「御國産み」のこゝが始まり、本州を始め、四國・九州・壹岐・對馬・佐渡・及び其の島の々々を次から次で産ませ給ひ、又産みませる數多の御子の神々を、それ々の司に任命して、山川・草木・滄海・國土等を掌らしめ、茲に始めて大八洲國の「修理固成」の大命を遂げ、之を高御産靈神・神産靈神に御復命になつた。

そこで、高御産靈神は伊弉諾尊に相謀らせ給ひ、此の修理固成せる大八洲國を統治すべき大任を天照大御神に御委任になつた。天照大御神は、伊弉諾尊の御子様で「光華明彩、六合の内」に照り徹る「書紀に記され、女性ながらも日神にて、其の御徳太陽に比すべき尊い神様である。ここに、天照大御神は、御委任のまに上つて天位に就き、高天原を都として六合に君臨しました。是れが即ち日本に於ける國家の根源、皇室中心的君民同治の起源である。

日神天照大御神の御威光は、天の下至らぬ隈もなく、出雲を中心させる裏日本一帯は、日神の

御弟素盞之男尊の御子孫である大國主命の年久しく經營し領有き給へる國土であつたが、天に二日なく地に二君あるべからず。乃ち日神の大神のまに、大國主命は謹んで歸順の誠意を表し、國土を奉還して長く皇室の藩屏たらむことを誓はれ、ここに天下は始めて確實に統一されたのである。これ恰も徳川氏が、藩籍を奉還して、天下一統の世になつたのに似てゐる。

是に於て、天照大御神は、高御産靈神に御相談に相成り、天孫瓊々杵尊を此の土に下し、天下統治の大任を命じ給ひ、ここに太古史上最も重大な天孫の降臨となり、天祖の神勅は此に渙發せられ、三種の神器は傳國の寶器として、「此の鏡を見ることわれを見るが如くせよ」として、日神手づから天孫に授け給ひ、帝國肇造、國家經營の御鴻業は、かくして、づんづ進展して來た。神勅に曰く、

豐葦原の千五百秋の瑞穂國は是れ吾が子孫の王たるべき地なり。宜しく爾皇孫就きて治らせ。さきくませ。寶祚の隆えまさむことまことに天壤と共に窮なかるべし。

此の神勅が、即ち萬世一系君臣一體・忠孝一本等、皇道即ち日本精神・國民道德・帝國憲法等の根源をなし、以て萬邦無比の國體を樹立したのである。

日本書紀に見えてゐる天祖の神勅の「行矣」を、學者は、「さきく」、又は「さきくませ」と訓ませてゐるが、「さきく」では語をなさぬ。「さきくませ」さか、「さきくあれ」さかすべきである。然るに世の多くの修身書には「就いて治らせさきく」と、一語に作つて二重の誤を傳へてゐる。「就いて治らせ」は、國に就いて國土を治め給への意。「行矣」は、俗に「御機嫌好う」といふ意で、行幸ますさきく、恙なくおほせと壽ぎ稱へる意で、二者全く別語である。纂疏に「行矣は行を送るの詞」と見え、漢書外戚傳の註に師古曰く、「行矣は猶今の好去と言へるが如し」とありて、萬葉集五の好去好來歌に「都々美無久、佐伎久伊麻志且」。同九に「吾子好去有欲得」。同十三に「新夜乃好去通牟」とある。

右の如くさきく(幸)は、「さきくませ」さか、「ありこそ」さか、「通はん」さかの如く、下に承ける言葉がなくては語をなさぬやうに、「さきくませ」させれば、正しい語とは思はれない。大切な神勅ゆゑ、一言しておく。

こゝに瓊々杵尊は、神勅三種の神器を奉じ、天兒屋根尊・太玉命・天鈿女命・石凝姥命・玉屋命等八十萬神を従へ、いよく日向の高千穂の宮に天降りしました。この事、明治天皇が、慶應三年車駕東京に御遷幸になつたのに酷似し、感無量である。御年もかれこれ同じ位の御若さで入らせられたかこ拜察し奉る。

高千穂宮は、今の宮崎市の附近である。天孫瓊々杵尊は、此處を皇居と定め、天下を知しめす。こゝ年頗る久しく、壽を以て御崩御遊ばしたので、御子彦火々出見尊が、上つて天位に就き給ひ、尋で鵜茅尊不合尊の御世を経て、茲に始めて神武天皇の御代となつた。

神武天皇は、英邁勇武、夙に中央御進出の大志があり、御年四十五歳の時、始めて諸兄及び皇子に告げて宣はく、

昔、我が天神高御産靈神・大日靈尊、此の豊葦原の瑞穂國を擧げて、我が天祖彦火瓊々杵尊に授け給へり。是に於て、彦火瓊々杵尊は、天關を闢き、雲路を押し分けて、到りましぬ。是時世は鴻荒に屬し、時は草昧に鍾れり。故に養正以て此の西の偏を治め給ひき。皇祖・皇考は、乃ち神乃ち聖、積慶・重暉、多く年所を歴たり。而るに遼遠の地、猶ほ未だ王澤に霑はず、邑に君あり、村に長あり、各々疆を分ちて相凌ぎ轢る。聞く東方に美地あり、彼の地天業を恢弘し、天下に光宅するに足らむ。何ぞ就きて都造らざらんや。

こ。諸兄及皇子皆對へて曰く、「理實に灼然なり。我等亦恆に以て念こしつ。宜しく早に行きま

せご。茲に神武天皇、いよく東遷の途に上り給ふことになつた。

一〇

「双に軋らずして天下を平定せん」。この御念願であつたけれども、皇軍に反抗するものがあり、各處に戦を交へ、前後六年の苦心を日月を費して、車駕始めて大和の地に御到達遊はされ、茲に建都の議を定め、勅を下し賜ふことになつた。その一節に曰く、

恭しく寶位に臨み、以て大御寶を鎮めむ。上は則ち乾靈國を授け給ひし徳に答へ、下は則ち皇孫正を養ふの心を弘め、然して後、六合を兼ねて都を開き、八紘を掩うて宇を爲さん。亦可からずや。

かくて畝傍山の東南橿原の地に都を營みて、天位に上り給ひ、ここに人皇第一代建國紀元第一年の基を定め給うたのである。

爾來代を代ふること百二十四年を経ること二千五百餘年。其の間治亂盛衰常ならず、政體は幾たびか變遷したけれども、未だ會つて外國の侮を受けず、天神の定め給ひし我が國體は、亦會て微動だもせず、今や一躍して世界の一等國となり、國威隆々旭日昇天の勢である。是れ「我が國ながら尊かりけり」。と歌ひ給ひし所以か、と拜察し奉る。

而も、あはれ、明治大帝御登遐遊ばされてより茲に十九年、内外の形勢大に一變し、内にしては思想問題・經濟問題等、幾多の難關があり、外にしては外交振はず、通商も亦非なるあり、かくして推移せば、我が皇國の前途實に寒心に堪へざるものがある。我等國民たるもの、大死一番、以て奮勵驟起せずして可ならむやである。

橿原のとほつみおやの宮柱たてそめしより國はうごかず

是は、我が國體の尊嚴を國礎の鞏固にして動かざることを述べて、感恩報謝の意を歌ひ給うたものと拜察し奉る。橿原の遠つ御祖即ち神武天皇が天下を平定して大和の橿原の地に宮柱を太敷き建て、皇居を造營し、以て建國紀元第一年の基を開き給うてから、この方、二千五百餘年の久しき今日まで、國の礎は微動だもせず、まことに尊い國柄であるが、これに申すも全く皇祖神武天皇の御恩によること、何れも感謝に堪へない次第であるこの意である。

願ふに、建國以來二千五百餘年の間には、いろいろ重大なる事變もあり、外寇もあり、或は藤原氏の專横となり、或は幕府の執政となり、幾變化して來たけれども、神國日本は、八面玲瓏

して東海の天に屹然せる富士の靈岳の萬古變らざるが如き有様である。八田知紀翁の歌に

いくそたびかきにごしても澄みかへる水や御國の姿なるらむ

と詠まれたのは、實にわが國體をよく言ひ表はした歌である。我々は、まずく一致協力、以て國礎の安固を計らねばならぬ。

人もわれも道を守りてかはらばこの敷島の國は動かじ

かく微動だもせぬ國柄なれば、國民皆が一致協力して之を守りさへすれば、決して永久に動くことはない。されど、若し國民が外來の悪思想にかぶれて、日本人たるの精神を失ひ、國體の如何なるかを忘れて、之を擁護するの自覺がなかつたならば、如何に堅固な國礎でも、遂には動いて國家は滅亡する。まことに恐るべきではないか。

「敷島の國」は日本の別名。「道」は人倫の道、人間の踐み行ふべき道。「古今ニ通シテ謬ラス中外ニ施シテ悖ラざる」斯ノ道である。皇道といひ、國民道德といひ、惟神の道といふも、皆同じである。

世はいかに開けゆくとも古の國のおきては違へざらなむ

「國のおきて」は、皇國の國ぶり。國體・歴史・道德・制度・法律等で、こゝでは、重に國ぶり・國體・道德等を指し給うたものニ拜察し奉る。「たがへざらなむ」は、違へないやうにして欲しいと、御希望あらせられたのである。

學術が如何に開けて人智が進んでも、世が如何に文化文明に趨いても、一國の精神であり、魂である國のおきて、即ち國體・歴史・道德等は、斷じて違へるやうの事があつてはならぬ。若し違へるやうなこゝがあつたら、それこそ國家の破滅である。此の點深く誠め給うてある。

善きをとり惡しきを捨て、外つ國に劣らぬ國となすよしもがな

實に積極的・進取的な尊い御製である。是れ日本民族が三千年來の傳統的大精神で、彼の五ヶ條の御誓文に

知識ヲ世界ニ求メ大ニ皇基ヲ振起スヘシ

こ、宜はせられた勅諭の註脚こも申すべきである。

學問知識を、世界に求むるに就ては、毛嫌ひしてはならぬ。ちようご蜜蜂が蜜を造るやうに廣く何れの花からも求め採らねばならぬが、最も大切な注意は、汚い露や、雨水や、その他不純な汗なごは、一切捨て、その中の少量だけでも好い、純粹な甘汁だけを取つて、こゝに蜂蜜こいふ一種特別なものを創造するが如くせねばならない。明治時代の先輩は、かくして驚異的な新日本の大文化を築き上げたのである。

これを上古に溯つて考へて見るに、彼の儒教の渡來に當つても、易姓革命、禪讓放伐の如き惡思想は、一切捨て、忠信孝悌の大道のみを採つて、我が肉こし血こした。佛教の如きも、決して其のまゝには受け入れなかつた。まづ大日本國體、大日本歴史こいふ大熔爐の中に入れて、之を吹き分け、之を分解して、善きは取り、惡しきは捨て、悉く之を日本化して了つた。キリスト教も、歐米の文化も、かくして今や殆んど日本化して了つた。マルクス、エンゲルスも、亦やがて我が大熔爐の中に入つて、吹き分けられ選り分けられ、以て我に忠實なる一教師こなつて働いてくれるこも、彼の釋迦・孔子・キリスト等の我に於けるが如くならむこも、私は信じて疑はぬ。

あゝ、わが敬愛する天下幾百萬の青年よ、生徒よ、學生よ、覺めよ、醒めよ、我が國民性に目覺めよ、わが國體に目覺めよ。わが歴史に目覺めよ。わが國は神國なり。われ等は神の子孫なり。何すれぞ他民族の配下に立ち、他民族の順使に甘んじ、他民族の手先こなつて、自國を攪亂するが如きこもを敢てすべき。日本の青年は、須らく世界幾多民族の先登に立つて、之をリードするの大覺悟がなくてはならない。これが即ち我國建國の大理想であるのである。

千早ぶる神のこゝろにかなふべく治めてしがな葦原のくに

「ちはやぶる」は、神の枕詞。「葦原の國」は、日本の別名。「しがな」は、たいものぢやこ希望の詞。神の御心に叶ふやうに、此の豊葦原の國なる日本を治めたい。この御希望を述べさせられた御製である。

神の御心に叶ふ御政治こは、即ち、明かき、直き、清き、正しき御政治である。學者の所謂徳治主義こか、王道主義こかいふ人爲的主義なごを超越した、自然の神ながらなる明るい・正しい・皇道的政治である。世の爲政者は、宜しく千誦萬誦して鑑こすべきである。

三種神器 二首

天照らす神のさづけし寶こそうごかぬ國のしづめなりけれ

「國のしづめ」は、國の動かぬための押へ、おもしである。三種の神器は、皇位授受のみしるで、天照大御神が天孫瓊々杵尊に授け給うてからこの方、世々受け継ぎ給ひて、「鎮國の神寶」になり、「傳國の寶器」になつて、今に及んでゐるのである。

神代よりうけし寶をまもりにて治め來にけり日の本つ國

「神代よりうけし寶」は、三種の神器。三種の神器は下に云ふ皇道的精神を象徴つたもので、此の精神を含めて「守にて」ミ、仰せ給うたものミ拜察する。「治め來にけり」は、天孫瓊々杵尊以來、明治天皇に至るまでの世々の天皇を指し給うたものミ思ふ。

一首の意は、天孫瓊々杵尊よりこの方、世々の天皇を経て自分の代に至るまで、天祖天照大御神から受け継いで來た三種の神器を、天皇治國の守り本尊として、動かぬ國のしづめとして、大

日本帝國を治めて來たのであるが、まことに尊い神寶であるこの御言葉である。

三種の神器は、申すまでもなく、八咫鏡・八坂瓊曲玉・草薙劍であるが、是は單に物的寶器であるばかりでなく、皇道的精神を象徴したものだから尊いのである。之には學者によつていろいろの説がある。神皇正統記の著者北畠親房は、正直・慈悲・智慧を以て、鏡・玉・劍の意義とし、一條兼良・林羅山・山鹿素行等は、智・仁・勇の三達徳を配し、近代では、眞・美・善。又は、智・情・意なきの意義を附加してゐる。

天照大御神が天孫瓊々杵尊に寶鏡を授けて「此の鏡を見ること吾を見るが如くせよ」この御言葉には、深い意義のあること自分は思ふ。即ちわが神ながらなる精神である明き・直き・淨き・正しき精神は、此の鏡を以て象徴したものと思はれる。此の明き・直き・淨き・正しき精神が、即ち天照大御神の精神で、同時に皇道精神であるのである。熊澤蕃山が「三種の神器は、神代の經典なり。上古には書なく、文學なく、器を作りて象となす」。こいへるは卓見である。

道 四首

千早ぶる神のひらきし道をまた開くは人の力なりけり

「千早ぶる」は、神の枕詞。「道」は、前に申した通り「斯ノ道」であるが、更にその内容に就て申せば、天皇中心の日本民族の結合、君臣一體・上下感孚の切つても切れぬ父子的情の結合、民本的御仁政、犠牲的忠孝、献身的國家奉仕等である。「神の開く」は、即ち「斯ノ道ハ實ニ我ガ皇祖皇宗ノ遺訓ニシテ」にある通り、神の開き給ひ樹て給うたものである。「徳ヲ樹ツルコト深厚ナリ」。即ち是である。

下の「開く」は、即ち後世の我等が、ますく「斯ノ道」を擴め充すと同時に、更に日新日進の世に後れず、よきを採り、あしきは捨て、新思想・新道徳を博く取入れて、以て大に皇基を振起し、燦然たる文化を建設するの意を拜察し奉る。

皇祖神武天皇は、「天業ヲ恢弘シ、天下ニ光宅ス」、宣ひ、「六合ヲ開キテ都トナシ、八紘ヲ掩ウテ宇ト爲サン」と宣うた。是れ即ち神の開き給ひし道を更に開き弘め給ふの大精神である。され

ば、我等も此の御垂訓を奉體し、我が神ながらの大道を遍く國內に普及徹底せしむるは勿論、更に世界人類に及ぼし、眞に道徳上の帝王となつて世界に君臨することは、實に我等國民の力に依つて始めて出来るのである。願くは「斯ノ道」を擴充し恢弘し、更に東西文化を打つて一丸となし、以て世界に光被し、世界の文化に寄與することが、此の大御心に奉答する所以の道であることを思ひ、大に努力して貰ひたいものだと思ふ。

開くべき道はひらきてかみつ代の國の姿を忘れざらなむ

これは、前の御製も、又前の「國のおきては違へざらなむ」の御製を併せ考へて欲しい。即ち「斯ノ道」を開き廣め、更に他の思想道徳を博採することは、洵に大切なことであるが、これに就て最も注意すべきは、上つ代の姿、即ち太古上古の國ぶり、手ぶりを忘れないやうに、我が國固有の道徳、固有の國民精神に違はぬやうに、氣を付けよこの御垂訓である。世の幾多外國かぶれの人々よ、願くは猛省三思せよ。

よござまに思ひな入りそ世の中に進まむ道ははかどらずとも

ひたぶるに進み行かうと思ふ我が道、わが事業が、よしや遅々としてはかきらなくても、決して不正不義を爲す勿れ。飽くまでも天地の公道に従ひ、社會正義に則り、一舉一動せよ。この尊い御誠である。上大臣より以下、何ぞ夫れ不義・不正・不善者の多き。「渴しても盗泉の水を飲まず、熱しても惡木の陰に息はず」。願くは諸君、深く肝銘せられたい。

ならば行く人にはよしや後るとも正しき道をふみな違へそ

「並ひ行く人」は、われを並べ、スタートを切つて競ひ行く人、又同級・同僚なき競争の仲間。「ふみなたがへそ」のなは勿れ、そは其れ。踏み違ふ勿れの意。そをぞ濁るは非。

一音の意は、われを並べて進んで行く競争の敵に、たごひ遅れるこことがあつても、決して不義不正なきして、人の人たる正道を踏み違ふこことがあつてはならぬ。如何に困つたこて、假にもカンニングなきして、男子の面目を傷けるやうなこことがあつてはならぬ。又たごひ競走には

負けても、男らしく堂々負くべしだ。彼の宇治川渡渉に於ける佐々木高綱の行爲の如きは、實に日本武士道の名折である。

敬 神 崇 祖 六 首

つくぐと思ふにつけて尊きは遠つみおやの御稜威なりけり

「遠つ御祖」は、いざなき いづなみ 冊の神様を始め奉り、天照大御神より神武天皇に至るまでの御祖先を指し給うたものご拜察する。

天祖國を開き給うてから此の方、治亂興廢常ならざりし雖も、而も國體の上に何等異變もなく、今や世界一等國として萬國を親善を結ぶに至つてゐるのは、思へば實に遠つみおやの御稜威であるご、報本反始、感恩報謝の餘に出で給うた御製ご拜察し奉る。

日本の本の國の光のそひゆくも神の御稜威によりてなりけり

この御製も、前ご同じい意味である。「添ひ行く」は、國の光が日に月に寝々乎ごして進み行く

ためしなく開け行く世を見ることも導く神のませばなりけり

これも、同じ御心持を歌ひ給うた御製である。「ためしなく開け行く世」は、東洋の一小帝國が、わづか半世紀足らずの間に、一躍世界列強の上に進出し、ますます發展しつゝあるをいふ。是れ實に世界歴史上會て例なき奇蹟的事實である。

とこしへに民安かれと祈るなるわがよを守れ伊勢の大神

蒼古にして神調、國家的大作である。「わがよを守れ伊勢の大神」に仰せ給うた所、至誠日月を貫き、語力鼎を扛ぐとも申し奉るべし。「いのるなる」は、我世に續く語で、「永久に民安かれ」も、朝夕祈らぬ間なきわが世、即ち 明治天皇の御代を守り給への意。一首の意は明かで、有り難しとも有り難し。

遙にも仰がぬ日なしわが國のしづめと立てる伊勢の神垣

「遙かにも仰がぬ日なし」。毎日く御遙拜遊ばすのである。われ等臣民も、亦此の心懸を以て日夕伊勢大廟を遙拜致したいものである。「我が國のしづめ」は、國の動かぬための押へ、國の守り神。「伊勢の神垣」は、伊勢の大神おほがみといふ意に同じ。

國民のひとつ心につかふるもみおやの神のみ恵にして

國民が、一心同體くこたみになつて天皇に仕へ奉るこゝは、實に天皇におかせられては、唯一無二の御喜びである。而して此の喜びを得るも、全く天祖・皇祖の御恵であるこゝ、感恩報謝・敬神崇祖の至誠を漏らし給うた御製である。

敬神崇祖の精神は、わが國體の基礎である。わが國でいふ「神」は、彼のゴッドゴッドといふが如き理神でなく、天照大御神を始め奉り、幾多肇國の御事業に功勞のあつた諸々の神様、夫れから神武天皇より 大正天皇に至るまで百二十三代の天皇、及びこれ等天皇を中心として國家の爲に働

いた忠臣・義士・孝子・節婦等が神として祀られた人々をいふのである。

「祖」は、廣い意味で二つある。一つは前に述べた神で、一つは天照大御神から今日に至るまで、皇室を中心として天壤無窮の寶祚を扶翼し奉つて來たわれ等臣民の祖先である。

而して、是等の神、是等の祖先は、前にも述べた通り、此の日本國を肇造し、萬邦無比の國體を建設し、三千年の美しい歴史を造り、日本文化を産み出して世界の一等國にまで築き成した方々である。今日日本の文化文明は、皆是等祖神祖先の努力の累積である。我々が生産し、我々が造り上げたものは、まだ一つも無い。我々は、皆祖神祖先の恩恵に頼つて、日々生を樂み、世渡りを爲し、世界一等國民として、列強の間に幅を利かしてゐるのである。

此の廣大無邊な恩恵に對して、誰か感謝せざるものぞ。「あゝ有り難い」。この嘆聲は、人間である以上、必ず心の奥底から自然に湧いて來る筈だ。此の「有り難い」。こいふ嘆聲が、即ち敬神崇祖の誠ミなつて現はれるのである。

是に於てか、祖神祖先に向つて、報本反始・感恩報謝の誠を捧けて、之を敬崇するに同時に、われ等の祖神祖先が建設して下さつた此の日本の文化文明の上に、更に新しき善きものを建設し、

こいつて、決して基礎を破壊し、「おきて」を變革してはならぬ。之を改善し、修繕し、増築して、以て現在をより大きく、より高く、力あらしめ、光輝あらしめ、而して更に之を後世子孫に譲り渡すこいふこゝが、即ち報本反始・感恩報謝の最も大切な職分であるのである。過去に感謝し、現在を偉大にし、以て未來に譲り渡す、是が敬神崇祖の根本義である。此の點、御互篤心心得て、朝夕心を律したいものだと思ふ。

誠

四首

鬼神を泣かすものは世の中の人の心の誠なりけり

「誠」の尊きを訓へ給うた御歌である。「誠」は天真である。まごころである。誠心誠意、嘘・偽の無い、飾り氣の無い、純真な心である。「一片の丹心萬古を照らす」こいふ丹心である。赤心である。「泣かする」は、感動せしむる意。

目に見えぬ鬼神を感動せしめ泣かしめるものは、御仰せの如く、實に人の心の誠である。心の誠を以て對へば、鬼神を感動せしむるは勿論、我々人間も亦感動し、禽獸だも亦感動する。猛虎が

孝心に感動して少女の前に耳を垂れ尾を垂れてひれ伏したといふ話もある。孟子曰く、「誠は天道なり。之を誠にするは、人の道なり。至誠にして動かざるものは未だこれあらざるなり」云。誠の心を以つて君に仕ふれば、君必ず動く、之を忠といふ。誠の心を以て親に事ふれば、親必ず動く、之を孝といふ。兄弟に在つては友、夫婦に在つては和、朋友にあつては信、人には仁慈となり、生物には愛護となる。而してその因つて生ずる心の本は、皆「誠」の一字から来る。故に曰く「天の理法は誠の一字に歸す」云。誠の尊き所以、以て知るべきである。

目に見えぬ神にむかひて恥ぢざるは人の心の誠なりけり

是れ亦「誠」の尊きを訓へ給うた御歌である。「神に對ひて恥ぢざるは」は、俯仰天地に恥ぢざる云。何等心に疚しい云がなく、神の御前でも毫も恥づることの無い光風霽月の如き清きさわやかな襟度である。「神人冥合」。「神人一如」といふ境涯である。

かくも清い爽やかな襟度・境涯を、吾等は日常不斷有つてゐたいものである。然らば如何にすれば之を得られるか。そこで 明治天皇は、「人の心の誠なりけり」。云御垂訓になつた。實に千

古の金言である。誠！ 誠！ 誠は人間行爲の根本である。御互「誠」の一字を以て、始終したいものである。

とき遅きたがひはあれど貫かぬことなきものは誠なりけり

「いさ」は、疾である。速である。「たがひ」は、ちがひである。差別である。人には遅速賢愚のちがひはあるけれども、誠の一字だにあれば、如何なる事業に雖も、貫徹せぬことは無いこの御訓である。是亦千古の鐵則で、彼の勝海舟が、大西郷三郎の一度の會見で、江戸城を明渡し、旗本十萬の生靈を水火より救つたのも、亦「誠」の一字の働であつた。

何事におもひ入るとも人はたゞ誠の道を踏むべかりけり

人は如何なる業務に志しても、たゞ、誠の道を踏んで世を渡れ。然らば躓くことは決してあるまいこの御仰せである。「誠」は天の道で、我が皇道の根本精神である。

今や、天下滔々として浮華輕佻に趨き、「誠」の一字、漸く地を拂はんとし、眞劍・眞摯の如き尊

き精神も、日一日と薄らいで行くかの如き現状は、實に國家の深憂大患である。星に泣き董に泣く亡國的涙は多いけれども、世の爲、國の爲に濺ぐ大男兒の涙が乏しい。「一滴の涙痕千金よりも尊し」。かゝる涙は、「誠」の中からなくては湧いて來ない。

あゝ日月明かなりと雖も、あはれ此の國家の現状を如何せん。前途を如何にせん。之を救ひ之を打開して、國光を世界に發揚するは、只誠ある・眞劍味ある・まじめなる・青年諸君の努力を措いて外に無いのである。頼む！ 頼む！ 國家の爲に頼む！

日本魂 六首

事しあらば火にも水にも入りなむと思ふがやがて日本魂

日本魂、日本精神のはたらきを論じ給うた大作である。「事しあらば」は、一旦緩急あらばの意、一旦緩急ある場合には、水火をも辭せず、一身一家を抛つて國家の爲盡さんと思ふ犠牲奉公の精神が、即ち日本魂であるこの御仰せである。藤田東湖、吉田松陰兩先生の正氣の歌は、即ち此の御製の註脚として風誦すべきである。

「神州誰君臨。萬古仰天皇」。東湖先生はいひ、「仰見天子尊。神州臨萬國。乃是大道根」。松陰先生は申された。天皇中心・皇室中心の活動が、即ち日本魂の根本精神である。是れ前章幾多の御製にもある通り、天皇の我々臣民を子慈し給ふ御仁愛に對して、やむにやまれぬ感恩報謝の發露である。即ち上下感孚の發露であるのである。物部氏が佛像を難波の堀江に投じたこと、中大兄の皇子が入鹿を殺した事や、和氣清盛・田村將軍・北條時頼・楠公父子、下つて四十七士、寶曆の木曾川治水の薩藩士、櫻田の義士、維新の志士、日清・日露の忠勇義烈の將校下士卒等の献身的大活動は、皆是れ日本魂の發露である。此の魂熾んなれば、國家は興隆し、此の魂微なれば、國家は則ち衰微する。思はざるべけんやである。

敷島のやまと心をみがけ人いま世の中に事はなくとも

「やまこい心」は、即ち日本魂と同じである。日本魂を培ひ養ひ、磅礴として天地の間に漲らすべく努力せよ。こ御訓へになつた御製である。「敷島」は、やまこの枕詞。一首の意は、今は世の中に事はなく、天下泰平なれども、「治に居て亂を忘れず」、大に日本魂を磨き養へこの御仰せで

ある。又、「事はなくとも」を仰せられた反面には、平時に於ても、國の爲、世の爲、真劍になつて各自其の職務に働き、以て國家の興隆を計るこいふ精神が、即ち日本魂であるぞよ。こ御仰せになつた御意が、言外に溢れてゐる。

日本魂に、二つの魂がある。一つは荒魂、一つは和魂である。荒魂は一朝事ある際に發する魂で、發しては萬葉の櫻となり、凝つては百鍛の鐵となり、肉弾又肉弾、敵を殲滅せねば止まぬこいふ忠勇義烈な魂である。

和魂は、天下泰平の時、上下一致、相和し相睦み、各々其の生業に樂むこいふ和平協同の魂がこれである。即ち「皇路の清夷に當つては、和を含んで朝廷に吐く」の魂である。

此の兩の魂は、平常に於ても絶えず活動してゐる。積極的・進歩的・鬭争的勇猛な精神は、即ち此の荒魂の動きで、消極的・保守的・和平的柔和な行爲は、即ち和魂の動きである。神功皇后の三韓征伐の時に、住吉の神様の御誨に因つて「荒魂を搦きて軍の先鋒を爲し、和魂を請ひて王船の鎖を爲す」。こあるに因つてその作用を知ることが出来る。

敷島の大和心をみがかずは劍負ふともかひなからまし

堂々たる大垂訓。陸海の軍人、警官の方々、果して顔色ありや。實際一死以て君國に殉ずるの大精神がなかつたならば、徒らに長劍を背負つて威張つて見ても、何の甲斐もありません。全く案山子や木偶と同じだ。是れ豈獨り軍人警官のみなむや。御互國民たるものは日夕拜誦して、ますます砥礪以て君の御用に立つべく心懸けねばならぬ。

やき太刀のとつ國人に恥ぢぬまで大和心をみがき添へなむ

「焼太刀」は、よく切れるから「利」の枕詞で、こから轉じて、こつ國の枕詞となり、又磨きの縁語である。一首の意は、外國人に恥ぢないやう、いよくますます日本魂を養つて呉れよかし。こ望ませらるゝ御述懐の歌である。「そへ」は、添加の意で、一層ますます。「なむ」は、欲しいこいふ希望の詞。

國といふ國の鏡となるばかり磨けますらをやまとだましひ

「國といふ國」は、世界萬國のこと。「ますらを」は、大丈夫、大男兒といふ意で、重に青年諸君を指し給うたものと拜察する。一首の意は、世界萬國の鏡となり模範となつて、彼等萬國の人々から尊ばれ、仰がれるやうに、日本魂を磨いてくれ日本の青年達よ、御切望になつた御歌である。

日本魂を磨くといふことは、こりも直さず質實剛健なる國民精神を涵養し振作することである。質實剛健なる國民精神を涵養し振作すれば、國家は必ず興隆し、國光は必ず發揚する。國家が興隆し國光が發揚すれば、世界の國といふ國は、必ず我が國を手本とし、我國を仰ぎ尊ぶやうになつて来る。故に 大正天皇は宣はく

國家興隆ノ本ハ國民精神ノ剛健ニ在リ之ヲ涵養シ之ヲ振作シテ以テ國本ヲ固クセサルヘカラス

ミ、即ち此の意である

くろがねの的射し人もあるものを貫きとほせ日本魂

格調雄渾、意氣剛健、常人のものし難い丈高い御歌である。「くろがねの的射し人」は、盾人宿禰である。

宿禰は仁徳天皇の朝の人で、書紀に「高麗ノ國、鐵の盾、鐵の的を貢獻す。天皇、群臣百寮を集めて獻る所の鐵の盾、鐵の的を射しむ。諸人射通すこと能はず、唯だ的臣祖盾人宿禰、鐵の的を射て之を通しつ。高麗の客之を見て、其の射の勝れたるを恐れ、共に起つて朝を拜す。明日宿禰を美めて名を的戸田、宿禰と賜ふ」を見ゆ。是れである。

「つらぬき通せ大和魂」は、大和魂の力を以て汝の目的を貫徹せよ。この意。陽氣の發する處金石も亦透る、精神一到何事か成らざらむである。

わが國が、維新以來、國運衰々として進み、日清・日露の兩戰役を経て一躍世界列強の上に進出したのは、そもく何の力であるか問はゞ、私はたつた一言で答へる。曰く「日本魂の力である」。當時に於ては、支那も大敵であつた。ここに露國は、世界の六分の一を領有した強國で、

人口も多く、兵力も多く、武器も多く、軍資も多く、到底日本が敵すべき國ではなかつたのである。而も之を打ち破つたのは、外ではない。肉弾又肉弾、死を見ること歸するが如き日本魂の活躍、只是れのみであつた。

諸君試に思ひ給へ、現下我が日本が世界三大強國の一として世界に雄視し、特に・英・米・佛・獨なまから恐れられてゐるのは果して何の爲であらう。國の廣きが爲か、人口の多きが爲か、國富の優れるが爲か、物資の豊富なるが爲か、はた又國軍の力の優れたるが爲か、否、否、あらず。たゞ君國の爲には、舉國一致、一死以て之に當るこいふ日本魂あるが爲である。此の日本魂が熾んであるが爲、目下英米との均等は保たれ、世界の平和は保たれ、世界萬國も亦日本を恐れてゐるのである。若しこの氣魄・精神が微弱になつて、日本の日本たる一大特長・一大國民性が失はれたなら、日本は第二の支那になつて了ふより外ない。わが國民たるものは深く猛省して奮起するところがなくてはならない。

帝國憲法 二首

さだめたる國のおきては古のひじりの君の御聲なりけり

「さだめたる國のおきて」は、主として帝國憲法を指し給うたものかを拜察する。一首の意はわが制定した帝國憲法は、決して自分一個の考で定めたのではなく、又外國の輸入でもなく、昔のわが聖帝の定め給ひし御聲である。即ちわが皇祖皇宗の遺訓であり、神ながらなる神意であるこの御こゝろ。帝國憲法の第一條に

大日本帝國ハ萬世一系ノ天皇之ヲ統治ス

とあるは、即ち彼の天祖の神勅を奉體して、二千五百有餘年來遵守されて來た歴史上の事實である。

第二條の「皇位ハ云々皇男子孫之ヲ繼承ス」とあるも、亦天孫瓊々杵尊以來皇室の御家法である。第三十三代推古天皇以後、多少女帝の御踐祚なきにしもあらねども、之は一時の變則に過ぎなかつた。第三條の

天皇ハ神聖ニシテ侵スヘカラス

も、「天地剖判シテ神聖位ヲ正ス」ニ神武紀にあつて、天皇は現神ニ稱へ、古來萬民の上に神位を正し給うたのである。

第四條の「天皇ハ國ノ元首ニシテ統治權ヲ總攬シ」ニあるも、亦天孫以來の國憲である。中世屢々變亂を経、政綱其の統一を弛べたけれども、是れ亦一時已むを得ぬ便宜に出でたるに過ぎなかつた。その他の條章一ニして上古の制にあらざるは無い。「聖の君の御聲なりけり」ニ宣うたのは、獨り我が帝國憲法にのみ言ひ得る、世界の光輝であり、千古の鐵則である。

上つよの御代のおきてを違へじと思ふぞおのが願なりける

この「おきて」は、上つ代からの制定にかゝる、國憲・國法を始め、習慣・儀禮・道德等を含めて仰せ給うたものニ拜察する。

「だがへじ」は、違へますまい。こいふ意で、上古皇祖の定め給うた我が國の「國のおきて」は、決してたがへぬやう遵守して行きたい。この御思召である。これ等の「おきて」は、國體の基礎をなしてゐるのであるから、決して違へてはならぬものである。

「國」・「道」の幾多御製を通じて 明治大帝の大御心は、此の精神で一貫してゐるのに、深く注意して貰ひたい。然るに此の「國のおきて」を破壊し、三千年の歴史を破壊し、萬邦無比の國體を破壊せんとする、一種の精神病者が、我が國民中から出たのは、實に遺憾の極みであるが、それは太陽の前に於ける片雲に過ぎない。こゝを、我等は茲にわが有爲の青年諸君と共に之を斷言するを憚らぬ。

御 仁 政 二十一首

曉のねざめ靜に思ふかなわがまつりごといかゞあらむと

これは、「述懐」こいふ題にて詠ませ給うた御製であるが、至誠熱烈なる御自省のさま、眞に恐懼に堪へない。

古のふみ見るたびに思ふかなおのが治むる國はいかにと

これ亦御述懐である。「いにしへのふみ」は、古典、世々の歴史なきの書。

かくかりそめの寝ざめの御床にも、又古の書なき御覽遊ばすにつけても、常にみ思はわれ等臣民の上にあらせられる。我が政治は果して善く行届いてゐるか否うか、罪無きに泣く民はあらずや、醫藥無くして病になやむ不幸の人は無きか、民草の生活状態は如何に、思想問題・經濟問題は如何に。己が治むる現代の日本國は、中外古今の列聖賢王の御治世と比較して果して如何であらう。至らぬこゝはなきか。この強き御反省であるが、實に有り難く尊い限りではないか。

ひとり身を省みるかな政治たすくる人はあまたあれども

「政治佐くる人」は、宮内官の人々を始め、總理大臣以下の大臣達。かく輔弼の人々は澤山あるけれども、而もなほ我が身に過は無きか、政治上に缺陷は無きか、獨り日々反省して見るこの大御心。只々感激の外は無い。

罪あらばわれを咎めよ天つ神民はわが身の生みし子なれば

天の神よ、もし民が罪を犯して天罰を加へ給ふこゝがあつたら、それは自分を罪し給へ。民は

自分の生んだ子。民の悪いのは親のわるい爲であるから、さうぞ自分を罰し給へこの御仰せ。神功皇后の三韓征伐の詔に「若し事就らば、群臣共に功あり、事就らずば吾獨り罪あらむ」。此宣はせたると同じで、「民の富は朕の富なり」。民の罪は朕の罪なり。この御精神は、世界に二つとない神ながらなるわが君民道の根本義である。

明治天皇四十五年の御治世は、盛徳大業、世界歴史あつて以來未だ曾つて無い驚異の事實で、中外人の齊しく渴仰讃嘆して措かざる所である。にも拘らず、かくも強き御自省の御聲を承るこゝは、實に世界の人主に類例のないこゝで、是が我が皇國に於ける傳統的皇室の尊い美しい御精神である。天皇既に此の御心あり、臣民豈感泣して一身を献げざるを得んや。今上天皇御即位式の勅語に、

皇祖皇宗國ヲ建テ民ニ臨ムヤ國を以テ家ト爲シ民ヲ視ルコト子ノ如シ列聖相承ケテ仁恕ノ化下ニ洽ク兆民相率キテ敬忠ノ俗上ニ奉シ上下感孚シ君民體ヲ一ニスレ我カ國體ノ精華ニシテ當ニ天地ト竝ビ存スヘキ所ナリ

此宣はせしたのは、實に宜なるかなである。

上つ代のことをつばらに記したる書をしるべに世を治めてむ

「上つ代の云々」。これは古事記、日本書紀なきを始めとして、上代の典籍・歴史等の書を指し給うたものご拜察する。「つばら」は詳かである。即ち是等の書を道しるべ、こして、わが世を治めむこの御意、洵に有難い御思召である。

照るにつけ曇るにつけて思ふかなわが民草の上はいかにと

「照るにつけ曇るにつけて」も、民草の上を思ひ給ふ。まして寒暑・風雨・地震・火災等の天變地異に於ては尙更である。日夕不斷、一寸した事にも、我が民草の上に障りなきか、御軫念遊ばす大御心の程、有り難い次第である。

國民のうへ安かれと思ふのみわが世に絶えぬ思なりけり

「おもふのみ」の「のみ」。及び「絶えぬ思」に注意せよ。わが思は外になんにもない。たゞ國民

の安寧幸福にあれかしと思ふこのみが、我が世に絶えない思であるこの御意。

曉のねざめの床におもふこと國と民との上のみにして

前の御製と同じ御意。「上のみに」注意せよ。勿體ない。忝ない。

千早ぶる神ぞ知るらむ民のため世を安かれといのる心は

「千早ぶる」は、神の枕詞。「世を安かれ」は、色々の意味がある。風雨時に順ひ、寒暑其の時を得、五穀穰々としてよく登り、以て萬民が安樂をするやうにこの意を始めこして、思想上、經濟上、其の他百般の國情が、宜しき正しき道に進んで、天下泰平、人民安寧、以て生を樂しむやうにこの御意かご拜察し奉る。「民のため」に注意せよ。

かく「民安かれ」を祈る心は、人にも語らず、色にも出さぬから、誰も知るまいが、神様はよく御照覽ましますことと思ふ。この切ない御衷情である。

國民の業にいそしむ世の中を見るにまされる樂はなし

以上數首の御製の如く、民草の上をのみ思ひ給ひ、祈り給うて、御心の安まる時にては入らせられぬのであるが、さて萬民が各自其の精神を作興し、一所懸命になつて、各がじい、その職業にいそしみはけんで居る眞剣な世の中のさまを御覽になるご、ごんなに御喜びになるであらう。されば 大帝は、かゝる世の中のさまを見るに優れる樂は外にない。ご御仰せになつた。洵に有難い極である。されご、若し之が反對の國情であつたなら如何に。實に恐懼に堪へない次第ではないか。國家を以て家ごし、天下を以て職ごし給ふ上御一人の御心、拜察するだに涙の種である。

國のためたゞれずなりし民草に惠の露をかけなもらしそ

これは、明治三十九年日露戦争直後の御製である。「國の爲立たれずなりし民草」は、廢兵又はあはれな遺族である。その廢兵やあはれな遺族の上をおほし召し給ひて、論功行賞、又は遺族扶助等の詮議に當り、一人でも惠みの露を懸くるごを洩す勿れご、有司の人々に警告し給うたものご拜察する。まごごに有り難い限りである。

ほどく〜に心をつくす國民のちからぞやがてわが力なる

「ほどく〜」は、貴き賤しき、大なれ小なれ、身のほどく〜で、一人の遊民もなく、各々其の職務に心を盡すごごである。その心を盡して働いた總量が即ち國の力で、同時に天皇の力である。「民ノ富ハ即チ朕ノ富」である。「天皇即國家」。「國家即天皇」の理法は、ひごり我が國に於てのみ當籤るのである。

しづがすむ藁屋のさまを見てぞ思ふ雨風あらしき時はいかにと

「しづ」は、賤しき民、賤しい貧しい民の小さい藁屋の堀立小屋なご、御巡幸の時御覽になつたのであらう。「農家」ご題して御詠みになつたのが此の御製である。「雨風あらしき時は如何に〜」ご、御同情遊ばした大御心のほご、心をこめて見よ。「今の大臣や府縣知事なご、よく〜奉體すへき事柄である。

民のため年ある秋を祈る身は堪へぬ暑さも厭はざりけり

「年ある秋」は、漢語の有年で、豊年のこと。「堪へぬ暑さ」は、堪へきれぬ暑さである。炎暑甚しき年は豊年だといふ。この意味からして、人民の爲に豊年を祈る我が身には、堪へきれぬ此の暑さも厭はぬこの御仰せ。畏れ多い事ながら、全く「人民の爲の犠牲」、「人民への奉仕」で入らせられる。「天皇への奉仕」、豈に起らざるを得ないではないか。

かく皇國では、皇室の方からわれ等臣民に恵を垂れ、慈愛を懸け給ふこと、恰も親が子を慈しむが如くである。故に 大正天皇御即位の詔勅にも、

義ハ則チ君臣ニシテ情ハ猶ホ父子ノ如ク以テ萬邦無比ノ國體ヲナセリ

と仰せられてある。

暑しとも言はれざりけり煮えかへる水田に立てるしづを思へば

これも、眞夏八月の暑き日に御詠みになつた御製かご拜察する。水田に立つて田草を取る賤

の男女のこころを思へば、暑いなきごは申されぬ。ご満幅の御同情を寄せ給うたのである。

埋火にむかへど寒しふる雪のしたにうもれし人をおもへば

これは、寒い冬の夜、「をりにふれて」の御述懐である。「埋火」は、火鉢に埋めた炭火。その暖い炭火に對してもなほ寒い。「寒い」と仰せられたのは、心の寒さである。ふる雪の下に埋もれたあはれな人達を思ふこと、たゞひ身は埋火に對してても、心の悲しみに堪へぬ。この御仁慈の御思召である。

ちよろづの民の心を治むるもいつくしみこそ基なりけれ

「いつくしみ」は、仁であり、慈であり、愛である。ちよろづの民即ち萬民を治むる政治の根本は、仁慈・仁愛であるこの御垂訓で、爲政者は勿論、人の上に立つ世の人々の心すべき第一の信條である。

謹んで按ずるに、わが國體の精華の根本は、實に皇室の慈悲仁愛に在る。言葉を換へて申せ

ば、畏れながら、わが世々の天皇の民本的犠牲奉公の傳統的精神にありて信ずる。世々の天皇はいづれも皆齊しく「國民の上安かれと思ふのみわが世に絶えぬ思」で入らせられ、全く「臣民への犠牲的奉仕」。「臣民への獻身的努力」で入らせられた。是を以て我等臣民も亦感奮して、「天皇への犠牲奉仕」。「天皇への獻身的努力」になり、上下感孚して、以て君臣一體の純美な國體を造り成したのである。

わが天祖が、始めて此の土に天降りましたのも、萬代子孫臣民の安寧幸福の爲に美地を求め給はんが爲であつた。既に千五百秋の瑞穂國を見出して、修理固成の大創業を爲し給うたのも、「民安かれ」の御仁政を布き給はん爲、神武天皇の御東遷も、全土臣民の福祉安榮の爲、それ以外他に何の御念慮もなかつた。神武天皇の詔に、

夫レ大人制ヲ立ツルヤ義必ズ時ニ隨フ苟モ民ニ利アラバ何ンゾ聖ノ造ヲ妨ケン

ミ仰せ給ひ、崇神天皇は

惟フニ我が皇祖諸ノ天皇等ノ宸極ニ光臨セサスモノ豈一身ノ爲メナランヤ。云々。黎元ヲ愛育マンガタメナリ。

ミ仰せられ、垂仁天皇は、

父天皇ハ神祇ヲ禮マヒ祭り、己ヲ劬メ躬ヲ勤メ、日一日ト慎ミ給ヒキ。是ヲ以テ人民富ミ足ラヒ、天下太平ナリキ。

ミ仰せられ、仁徳天皇は、

君ハ民ヲ以テ本ト爲ス。云々。百姓ノ貧シキハ朕ノ貧シキナリ。百姓ノ富メルハ朕ノ富メルナリ。

ミ仰せられて、明かに民本主義の御政治を高調し給ひ、雄略天皇は、

方今區宇一家ノゴトク、烟火萬里、百姓は艾安ナリ。云々。義ハ即チ君臣ナレドモ情ハ父子ヲ兼ヌ。云々。筋力精神モ一時ニ勞シ竭セリ。此ノ如キ事、本ト身ノ爲ニアラズ、止ダ百姓ヲ安養セント欲スレバナリ。

ミ仰せ給うた。此の如きは枚擧に違あらず、大化の新政の如きは、民本的大改革でありしのみならず、一部何百卷といふ六國史以下世々の史實は、皆悉く「國富み民安かれ」の御仁政の記録に外ならぬ。

われ等今 明治天皇の御製を拜誦するに、是れ亦一こして國を思ひ民を思ひ給ふの御歌ならざるはない。是れ全く神代よりの傳統的中心精神であつて、世界萬國に比類なき善美の國體の無窮に續く所以である。我等臣民たるものは、此の有り難い國體の根本義をよく辨へ、ますます國運の進展に向つて、層一層の努力を拂ふこゝを以て衷心の念こせねばならない。

なりはひをたのしむ民の喜びはやがてもおのが喜びにして

「なりはひ」は、生業。生活のための職業。「樂む云々」は、樂んで生業を勵み生活の安定を得るの喜び。「百姓の富は朕の富なり」。こ仁徳天皇の宣ひし如く、民の喜びは、天皇の御喜び、民の喜びは天皇の御悲み。故に樂んで生業を勵み、各自生活の安定を得るの喜びは、即ち天皇の御喜びであつて同時に父母祖先の喜びである。天皇に在りては之を忠こいひ、父母祖先に在りては之を孝こいふ。忠孝一本の美、此に成る。勉めざるべけんや。

年々におもひやれども山水を汲みて遊ばむ夏なかりけり

眞に勿體ない。大日本帝國を知しめす一天萬乗の君にして、此の御言葉は勿體ない。而も目のあたり此の事實を見奉つたわれ等明治の臣民に於てをやである。此の事世界の帝王に無し。たゞ獨り日本の皇室にあるのみ。國體の精華、蓋し偶然にあらずである。借問す、廟堂の諸君子。世の富豪・紳士・淑女・並に學生諸君、卿等は此の御製を奉誦して、果して如何の感かある。避寒、避暑なき、思ひもよらぬ。今後の夏期休暇、冬休み、春休み等には、今より一層、心身の鍛錬、忍苦的修養にこゝ心懸けようではないか。

世の爲めにも思ふ時は庭にさく花も心にとまらざりけり

これは明治三十七年日露戰爭中の御製である。如何に世の爲、國の爲、御宸襟を憐まし給ひしか。われ等想像の外である。「庭に咲く花」は、つい近く御庭先に咲いてゐる花である。その手近くの花にだも心のこまらぬこの御仰せ、畏くも尊し。

松風の音のみきゝて年も經ぬいつかゆきみむ天のはしだて

五〇
噂のみ聞き給ひし 大帝は、果してよく此の御素願を遂げ給ひしか。天橋六里の松は、今なほ
健在なれど、大君の玉の御車、今いづこにか駐まれる。感じこ深く侍る。

日露の役に詠み給へる 十五首

おりたちて見る暇もなき春としも知らずや梅の咲き匂ふらむ

明治三十七年日露開戦當時の御製である。「皇國の興廢此の一戦に在り」この信號は、世界に
名高い歴史的な大文字であるが、實に此の役は、乾坤一擲、國家の運命を賭しての大戦争であつた
のである。畏れ多くも、わが大元帥陛下は、開戦以來、日夜軍務に御鞅掌遊ばされ、宵衣旰食、殆
んど御寸暇もあらせられぬ御有様であつた。「……知らずや梅の咲き匂ふらむ」。實に多情多
恨の御作ではないか。又ある時は、

戦のにはに立つ身をいかにぞと思へば花も見ること、ちせす

ご、出征の將卒を思ひ給うて、無限の同情を寄せ給ひ、又花に對し給うては、

近からばわが庭ざくら北支那の軍營に折りてやらましもものを

ご、見るもの聞くものにつけて、御思はたゞ出征軍人の上のみあらせらる。夏に入りては、

軍人いかなる野邊に明かすらむ蚊の聲しげくなれる夜ごろを

蚊の聲しげくなるにつけても「如何なる野邊に明かすらむ」。ご思ひやり給ふの御切情。親以
上である。暑さに向へば

千萬のあだを恐れぬますらをもこの暑さには堪へずやあるらむ

ご、滿腔の御あはれみを懸け給ひ、家族の上を思ひ給うては、

子等はみな軍のにはに出で果て、翁やひとり山田もるらむ

ご、萬斛の熱涙ご同情ごを田家翁に寄せ給ふ。戦報を待ちわび給ひては、

戦のにはの音信如何にぞとねやにも入らず待ちにこそ待て

「待ちにこそ待て」の御言葉。如何に切なる御心情ぞ。大元帥陛下ごしての當年の御心中、拜察するだに恐懼に堪へない。捷報を得給ひては、

軍人つくす力のあらはれてけふも進みしたよりをぞ聞く

喜ばせ給ふ。進みしは、數城を抜いて、更に十里二十里ご進軍するの謂で、勝ちにしなご宣はせざるごころ、畏れながら 大帝の巨腕を想見するごこが出来る。戦死の報を聞こしめしては、

戦に身を棄つる人多きかな老いたる親を家にのこして

とし経なば國の力となりぬべき人を多くも失ひにけり

悲しませ給ふ。年経なばの御製は、將來ますます國の力なるであらう年若き將校士卒の

死を嘆かせ給うたのである。

はからずも夜をふかしけり國のため命を捨てし人をかぞへて

當座の實感を歌はせ給うた御製である。漏れ承る所によれば、當時 大帝は、戦死者の名簿を畏れ多くも御座右に備へて、御身躬ら一々御覽遊ばしたごか。洵に有り難き御仁慈、戦死者諸君も、亦以て瞑すべきである。

三十八年一月二日、旅順開城の報を得させ給ひて、

新しき年のたよりに仇の城開きにけりと聞くぞうれしき

躍り喜ばせ給ひ、城下の盟成りては

かちどきをあげて歸れる軍人ま近く見るが嬉しかりけり

御満悦の御眉を輝かせ給ひ、出征の兵士凱旋すご聞こし召しては、

いさましく語りかはして軍人歸る船路に月や見るらむ

こ詠ませ給ふ。渤海灣頭月明かなり。船は舳艫相銜んで一步一步祖國に近づく。凱旋の將士は思ひくの戦話に花を咲かす。九重の雲井にましましながら、大帝の御思は遠くこれ等將士の上に及ばせ給ふ。御會心の狀、一首の上に横溢せるの感がある。

二ヶ年に互る大戦争も此に目出度く終局し、わが帝國は一躍して世界列強の班に列し、國光赫奕として世界を壓するの勢である。大帝は文武百官を従へ、車駕西幸、御躬ら伊勢大廟に戦捷の御報告をなし給うた。その時 大帝は、

久方の天にも昇ることちして五十鈴の宮にまゐる今日かな

こ詠ませ給うた。歡天喜地、御喜びの狀一字一句の上に躍つてゐる。若し此の戦にして日露地を換へ、我が帝國が戦敗國になつたら如何に、大帝の御心中を拜察し、感涙の流るゝを禁ぜないではないか。

願ふに、日露の役に於けるわが大勝利の原因は、要する所、「日本魂の力」たゞ是であつた。然るに今やいかに、眞に感慨に堪へざるものがある。あゝ日本の青年よ、結束せよ。祖國日本を救ふものは、實に君等を措いて外に無い。國の小弱なるを以て悲しむ勿れ、國軍の縮小を以て憂ふる勿れ。天下世界、只われ獨り有する日本魂の威力は、是等を補うて餘あるにあらずや。結束せよ日本の青年。

心

八首

さしのぼる朝日の如くさわやかにもたまほしきは心なりけり

名高い御歌で、實に古今の絶調である。歌の姿もさしのぼる朝日のごとく清朗高逸だ。かゝる爽やかな心を以て、學校生活に、家庭生活に、將た又社會生活に、國家生活に、日々を従事したならば、人間到る所として可ならざるはなしである。人から愛せられ、親まれるのは、實にかゝる性格の人である。

ともすれば思はぬ方に移るかな心すべきは心なりけり

迷ひ易く、移り易きは、實に心である。特に自主的精神のまだ確立せぬ、誘惑に陥り易い、群衆心理に驅られ易い、青少年に於ては尙更で、深く心すべきである。

ことなしとゆるぶ心はなかくに仇あるよりも危かりけり

油斷大敵だ。西郷南洲先生曰く、「平時は戦争の如くし、戦争の時は平時の如くせよ」。此の御製の註脚である。「なかく」は、却りての意。

かざらむと思はざりせばなかくに美しからむ人の心は

何事も正直にてあれ、無邪氣にてあれ、天真爛漫にてあれ、さつぱりして神のやうにてあれ、非を文り、偽を言ひ、虚飾・虚榮・強情を張るが、一番宜しく無い。この御心持から詠み出で給ひし御製かと思ふ。此の「なかく」は、前の「なかく」は異ひ、非常にミか、頗るミかの意。

あさみどり澄みわたりたる大空の廣きをおのが心ともがな

天空海潤、光風霽月の心境にてあれかし。ミ歌ひ給うたもので、是れ亦千古不朽の大傑作たるを失はぬ。天高くして鷺の飛ぶに任せ、淵深うして魚の躍るに任す。大丈夫の襟度は、かくあらねばならぬ。

「おのが心ともがな」は、淺みさらに澄み渡つた大空のやうな廣い、そして美しい綺麗な心を自分の心として、常にもつてゐたいものであるこの意。

物毎にうつればかはる世の中を心せばくも思はざらなむ

世の中の事は、變轉極りなきもので、今日の失敗も明日は成功の本となり、昨日の禍も今日は又福の種となるもの、それゆゑたミひ、憂さ、つらさ、悲しい事があつても、心を廣く大きくもつて決してくよくよ、思つてはならぬこの御訓である。「人間萬事塞翁が馬」。「禍福は糾へる

繩ヒの如し。要はたゞ、一步踏み出して奮勵努力するに在る。

廣き世にたつべき人は數かずならぬことに心を碎かざらむ

「數ならぬこと」は、下らないこと。何んでもないこと。物の數にも入らぬ小事・細事。

廣い世の中に立つて大に活動せんとする有爲の士は、小さい事に、くよくよして心を勞してはならぬこの御訓である。實際世に立つて活動せんするには、時には思はぬ失敗もあり、衝突もあり、毀譽褒貶きよぼはんもありして、心志を勞することが多い。されど、それ等は成功の前には何んでもない小事細事であるから、そんな事に心を碎かず、意氣を沮喪そまうせず、信する所に向つて、猛然奮然勇敢に戦つて最後の勝利を得ることが大切である。

集ると見れば離るゝ大ぞらの雲にも似たる人心かな

集合離散、反覆常なき世の輕薄者の上を悲みて詠み給うたものご拜察し奉る。杜甫の貧交行に、

翻セバ手作リト雲覆セバ手雨。紛々タル輕薄ンゾ何須ケン數。

君不ズ見管鮑貧時交。此道今人棄如ハテ土。

彼是思ひ合せて、感じこ深し。

仁 慈 二首

いつくしみ治あまねかりせば唐土もろこしの野に伏す虎もなつかざらめや

博愛仁慈の尊い御製である。「もろこし」は、支那のこと。「なつかざらめや」は、なつかざらぬや。必ずなつくといふ語。

仁慈の心、あまねく行き届いたならば、唐土の野に住んでゐる猛獸の虎でも、なつかないことには無い。まして況んや、斯の民をや。願くは有司百官よ、仁政を布いて、わが大御寶を愛撫せよこの御訓である。朝鮮・臺灣・樺太なきの統治者は、特に金科玉條として奉體すべきである。

國のためあだなす仇はくたくとも慈いづくしむべき事なわすれそ

これ亦博愛仁慈の尊い御製である。敵を碎くは國家生存の爲で、これには國力を盡し、民力を

盡してもやらねばならぬ。されど、敵對行動をせぬものや、捕虜や、戦闘力の無い老人婦女子などは、慈むべきを忘るゝ勿れ。この大御心である。

この大御心こそ、實に神ながらなる傳統的わが國民精神であるのである。日本書紀、神武天皇生駒踰えの條に、

我は是れ日神の子孫、日に向つて虜を征つは、此れ天道に逆ふなり。云々。神祇を祭禮し、背に日神の威を負ひ、影のまに／＼壓ひ躡まむ。かくすれば及に血ぬらずして虜必ず自ら敗れむ。

血を流し屍を横へることは、たゞひ敵にしても忍びなかつた。出来る限り徳を以て懐け、それでも聽かず手向ふ時、始めて鋒刃を用ゐるこゝが日本精神である。書紀、兄狛を討ち給ふ條に、

我必ず鋒刃の威を假らずして、坐ながら天下を平けなむ。

宣ひ、弟狛等を遣はし、利害を説いて兄狛の歸順を勧め給ふ時。

可かずんば兵を擧げて臨まむ、これ亦未だ晩からざる也。

仰せられてゐる。日本武尊も、この精神を奉體せられ、熊襲征伐の時にも、

熊襲八十梟あり、衆類甚だ多く、其の鋒當るべからず、少しく師を興さば、賊を滅ぼすに足らず、多く兵を動かさば是れ百姓の害なり。何ぞ鋒刃の威を假らずして坐ながら其の國を平けむ。云々。時に一臣あり曰く、熊襲に二女あり、之を納れて計らば、則ち會つて及に血ぬらずして、賊必ず自ら敗れむ。尊曰く可也。

景行天皇の東夷征討の時、日本武尊に諭し給へる詔に、

之に示すに威を以てし、之を懐くるに徳を以てし、兵甲を煩はさずして自ら臣順せしめよ。尊、頓首して賜ふ所の斧鉞を受け、再拜して奏したまはく、今神祇の靈に頼り、天皇の威を借り、往いて其の境に臨み、示すに徳政を以てし、猶服せざるものあらば、即ち兵を擧げて之を撃たむ。

全くの徳教主義、徳治主義、仁慈主義である。此の仁慈は、一つは敵に對して、一つは戦争によつて受くる人民の痛苦に對しての慈愛である。

かゝる精神は、神功皇后の三韓征伐の際にも見られ、世々に到る處にある。降つては、小楠公

の渡邊橋に於ける敵兵の救護の如き、島津義弘が朝鮮征伐から歸つて後、敵味方の供養塔を高野山に建てたるが如き、彼の赤十字的博愛仁慈は、我が日本に於ては、神代時代からの傳統的精神として、上下三千年、天地の間に磅礴してゐるのである。

日清・日露の兩役に於て、捕虜に對する優遇の如き、伊東司令長官が敵の大將丁汝昌に對して「武士の情」を打電して携劍のまゝ、降伏を許せしが如き、上村將軍が、肉を喰むもなほ且つあき足らぬ烏港艦隊を撃破しながら、其の將卒の救護に向つて至らざるなきが如き、幾多の美談は、皆我が傳統的日本精神の發露である。之を彼の歐洲大戰に於ける彼等交戰國軍の殘忍・慘虐、目も當てられぬ暴狀を彼此對照し來れば、思ひ半ばに過ぐるものがあらう。

世界平和 五首

梓弓やしまのほかも波風の靜なる世をわがいのるかな

戊申詔書に、

朕ハ爰ニ益々國交ヲ修メ友義ヲ悼シ列國ト與ニ永ク其ノ慶ニ賴ラムコトヲ期ス

「宣はせられ、大帝の世界平和に御尊念遊ばさるゝこゝは日一日のこゝで無い。此の御製は、明治三十五年日露の關係日に非なるの時、」をりにふれて」の御述懐である。「梓弓」は、「や」(矢)の枕詞。「やしま」は、大八洲國の略。やしまの外は、海外である。

此の頃、露國は、さきに遼東半島遼附をわが國に強ひながら、己れ却つて之を租借し、旅順に難攻不落の堅壘を築き、烏港に東洋艦隊の根據地を設け、着々準備を整へて南下し、一舉韓半島を屠り、一路直にわが國に肉薄せんとし、東洋の風雲頗る急なるものがあり、國を擧げて人心恟々たる有様であつたのである。此の時に方り大帝が如何に御宸襟を惱まし給ひしか、何はれて、畏しこも畏し。

四方の海みな同胞とおもふ世になど波風の立ちさわぐらむ

露の横暴は、遂に我に迫つた。我は自衛上、憤然起つて茲に砲火相見ゆるの止むなきに至つた。この御製は、明治三十七年、兩國開戦の初頭に於て、「正述ニ心緒こゝいふ題にて詠ませ給うたもので、平素各國との親交、世界の平和を念させらるゝ大帝が、如何に遺憾に御思召給うた

かは、一首の上に躍如として、世界的・國際的・拿い御作である。「四方の海」は、四海萬國。はらから「は、同胞兄弟。「波風の立ちさわぐ」は、即ち兩國戰端を開いて、世界の平和が破れたこと。「なき」は、何故。

へだてなく親しむ世こそ嬉しけれ鄰の國も事あらずして

「鄰の國は」、中華民國を指し給うたもの。支那も、この頃は國內無事で、御互心隔てなく親善の交を結んでゐるのは嬉しいことである。例の世界平和を愛好し給ふ大御心を反映し給うた御製である。

おのづからわが心さへ安からず鄰の國のさわがしき世は

「鄰の國も事あらずして」。喜び給うたのも東の間、忽ちにして此の御製を拜せんは。實に支那國民に對して同情に堪へない次第である。「一將功成りて萬骨枯る」。「動亂休まず四千年」。これ支那開闢以來の歴史である。これいふのも、全く支那の國祖なる堯舜建國の精神が善く

なかつた爲である。之を思へば、神國日本の國民は、實に有り難い。

久方の空はへだてもなかりけりつちなる國は塚あれども

平素世界の平和、國際的協調を念ひ給ひし 大帝の大御心。此の三十一文字の上に流露して、實に高い、深い、厚い、大きい、人類最高善の象徴も、神の御聲も申し奉るべき大作にてある。

けに久方の空には隔は無い。青い雲、白い雲、自由自在に飛んでゐるれども、誰もて咎むるものもない。然るに地なる國は、各々疆域を設けて割據し、虎視眈々、寄らば斬らんすの恐しい睨み合である。而して「日本人入るべからず」の制札は、世界到る處に立つてゐる。何たる狭い見苦しい人間の國ぞや。愛の教、人類愛の叫び、今果していつくにかある。

「六合を兼ねて都を開き、八紘を掩うて宇を爲さん」は、神武建國の大精神である。東西文化を融合して打つて一丸とした世界最高の道徳を以て世界に君臨し、世界の私心私慾を抑へ、横暴を制し、以て世界人類の平和と福祉を増進せしむることは、實にわれ等日本民族の一大使命では

なからうか。大帝の大御心も、亦こゝにあるか、畏れながら拜察し奉る。

奉 公 四首

身にあまる重荷なりとも國の爲人の爲にはいとほざらなむ

犠牲奉公の精神涵養を訓へ給うた尊い立派な御製である。國民にしても、公民にしても、犠牲奉公の精神より美なるはない。犠牲奉公の精神は、至誠熱烈な義務心から来る。権利のみを強調して、義務を忘れたる現代人は、實に禍なるかなである。

國を思ふ道に二つはなかりけり軍のにはに立つも立たぬも

「軍のには」は、戦場である。戦場に行つて戦ふ軍人も、國にゐて活動する國民も、何れも國を思ふ愛國心の發露で、忠義の道に二つは無いこの御仰せ。

これは、明治三十七年日露戦役中の御製で、當時軍人ならでは忠君愛國は出来ないかのやうに考へてゐるものも多かつたので、その然らざる所以を銃後の國民へ警告し給うたもの、三拜察す

る。世にも尊い御垂訓である。

おのが身をかへりみずして人のため盡すや人の務なるらむ

社會生活に於ける犠牲的精神、奉仕的精神を鼓舞作興し給うた是亦尊い御製で、頗る意義深いものがある。日夕奉誦して之が實行に力めたいものである。

國のためいよくつくせ千萬の民のこゝろを一つにはして

上下一心、協同一致、國の爲、社會の爲、大に力め勵み、以て此等の御製に奉答したいものである。

務 三首

おのがじし務を終へし後にこそ花の陰にはたつべかりけれ

「おのがじし」は、各自銘々。「花の陰に立つ」は、花見て遊ぶこと。各自銘々、己が一日の務を

終へ、一週の務を終へてから、花を見、月を見、物見遊山をせよ。己が務をおろそかにして、遊びにばかり耽つてはならぬ。「務め大事」。「勤勉第一」。この御仰せである。

花になり實になる見れば草も木もなべて務のある世なりけり

世には何等定つた職業を有せず、行ける屍しかばね走る肉、只だ父兄にのみ頼り、父祖の遺産にのみよつて衣食する遊惰の徒がある。これが人間第一の屑くずで、亦人間第一の罪惡である。この御製は、これ等の徒を誡め給うたものご拜察する。

一首の意は、草木でさへ、花を咲き實を結び、夫々務がある。まして萬物の靈長たる人間に於てをや。願くは、おのがじし職業を有つて、國家の爲働いて欲しいこの意である。

家富みてあかぬことなき身なりとも人の務に怠るなゆめ

是は「折にふれて」の御製であるが、彼の高等遊民の徒を誡め給うたものかご拜察する。家富みて飽かぬことなき飽食暖衣の身いつても、人の人たる職分は、夢々怠ること勿れこの御教訓

である。

働くといふことは、實に人の天職である。精神的にせよ、筋肉的にせよ、働かない人は、人間の人間たる價値は無いのだ。必ずや身のほごにつけて、金一文でも自ら生産し、米一粒でも自分で創造し、以て國家社會の爲に盡さねばならない筈のものである。然るに世には遊惰徒食・華奢淫逸、以て其の日を送るものが多い。世を毒し思想を悪化さすものは、多くは此の徒輩で、惡みても尙ほ餘ありご謂ふべしだ。願くは國家の爲、社會の爲、反省し自省して貰ひたい。

修 徳 十二首

易くしてなし得がたきは世の中の人の人たる行にして

これは、實踐躬行を御獎勵遊ばしたもので、父母に孝に、兄弟に友に、こいふやうな至つて易い手近な行でも、實行は中々困難なものだご御嘆息遊ばされ、だから、願くは各自努力して實踐躬行して貰ひたい。ご御希望あらせられた頗る含蓄深い御製である。古より幾多聖人賢者の教訓は、此の行にある。孔子は「訥言敏行」こいひ、「博學・審問・慎思・明辨・篤行」こいひ、「行つて餘力

あらば以て文を學べ」訓へた。「知行合一」の實行主義は、王陽明の首唱するところ。御互聖諭の旨を奉體して、大いに實行に力めたいものである。

人みなを選びしうへに選びたる玉にもきずのある世なりけり

風誦三四、飽くを知らず。何におやさしい、なつかしい寛容仁慈の御歌であらう。全く神の御聲である。

「良匠は朽木をも捨てず」。「完きを一人に求むべからず」。すべて人には、長あり、短あり、得手あり、不得手あり。そのほぎ／＼に善用するが、大人君子の事、「清濁併せ呑む」の雅量も此にある。

積りなば拂ふ方なくなりぬべし塵ばかりなる事と思へど

「悪は二葉に摘め」。「塵は日々拂へ」。積りなば拂ひ難く、成長しなば摘み取り難くなるぞ。この有り難い御教訓である。湯の盤の銘に、「日に新に、日に日に新に、日に又新なり」もある。

御互心の塵も、身の惡も、日々拂ひ棄て、日々摘み取つて、改過遷善、以て日新日進の善行を積みたいものだと思ふ。

かりそめの言の葉草もともすれば物の根ざしとなる世なりけり

口を慎め、「口は禍の門」の御訓、「かりそめ云々」は、何氣なく、不用意に言つたつ、いぢよつ、の言葉でも、意。「ものゝ根ざし」は、人の感情を害ふ本、人の恨の本といふころ。「言の葉草」にあつて、「根ざし」を受け給うたころ、修辭上の工思ふべし。

爲すことのなくて終らば世にながき齡を保つかひやなからむ

「爲すことのなくて終らば」は、醉生夢死である。醉生夢死の徒が、如何に長生きしたて、何の甲斐もないであらう。たゞ身のほぎ／＼につけて奮闘努力し、以て國の爲、世の爲、人の爲、何なりと役にたつ仕事を爲したならば、たゞひ三十で死んでも四十で死んでも、それこそ却つて長生きしたものと謂ふべしである。この御意である。

實際、人の價值は、年齢の長短にはよらない。事業の大小、人格の如何によつて論すべきものである。小楠公は二十六歳で戦死し、吉田松陰先生は二十九歳、キリストは三十二歳、アレキサンデル大王は三十三で死んだ。而もいづれも皆千古萬古不朽の偉人である。彼も人なり、我も人なり、豈醉生夢死して可ならんやである。

白玉しらたまを光なしとも思ふかな磨きたらざることをわすれて

白玉はもご美質である。磨けば磨くほご光を發する。人も亦性本善。學べば學ぶほご光を發する。此の白玉を、我々人間に譬へ給うたのである。

一首の意は、我々人間は白玉と同じく、磨けば磨くほご光を發し、學べば學ぶほご光輝を發するものである。然るに世の人は、學ばず磨かずして、成績が上らぬ、學業が進まぬといふ。誤つた考である。御諭し給うたのである。禮記に「玉琢かざれば器を成さず、人學ばざれば道を知らず」といひ、照憲皇太后の御歌に「金剛石も磨かずば玉の光は添はざらむ」と、訓へ給うたのも同じころである。

忍びてもあるべき時にともすれば過つものは心なりけり

忍耐の徳、勘忍の徳を養へこの御訓。「忍びても云々」は、忍ぶべき場合である。「ともすればは、過つかする」と、忍び得ないで過つことがあるこの意。張良・韓信の故事、耳に熟すれども行ひ得るものは妙い。心すべからず。

思ふこと思ふがまゝになれりとも身を慎まむことなわすれそ

「思ふこと思ふがまゝになれり」は、得意満帆の時代である。此の得意満帆の時代に、事は必ず失敗する。「勝つて兜の緒を締めよ」。「満は損を招き謙は益を受く」。故に得意時代には、特に身を慎め。深く誠め給うたのである。

ことそぎし昔の手ぶり忘るなよ身のほどほどに家造して

「ことそぎ」は、事殺きで、質素のこと。「手ぶり」は、ならはし、風俗。すべてに質素であつた昔

のならばしを夢忘る、こころなく、家作りなきも身分相應にして、決して驕り贅澤なきせぬやうに
 この御誠である。六十億の國債を背負ひ、經濟國難に直面してゐる吾等日本國民は、彼の獨逸
 人に見倣つて、質素儉約を専らにし、國富を造らねばならない。

心ある人のいさめのことの葉は病なき身の藥なりけり

「病なき身の藥」。病氣があつて飲むのは醫者の藥であるが、病氣のない身に飲む藥は、心ある
 人即ち同情ある益友・師長の諫の言葉である。「良藥は口に苦がけれど病に利あり。忠言は耳に
 逆らへば行に利あり」。よくよく服膺すべきである。

身にあまる重荷車をひきながらいそがぬ牛は躓かずして

諺に曰く、「急いては事を仕損ずる」。又曰く、「急がば廻れ」。御製の意もこれと同じで、
 まことに尊い訓である。今上天皇の朝見式の勅語にも、
 進ムヤ其ノ序ニ循ヒ新ニスルヤ其ノ中ヲ執ル是レ深ク心ヲ用フヘキ所ナリ

ご誠め給ふ。向ふ見ずの世の進歩主義の人々は、特に心して貰ひたいものと思ふ。

つかさ人捧ぐるふみは多かれど花みるほどの隙はありけり

「忙中閑あり」といひ、「英雄別貯一團春」といひ、皆人間に餘裕あるこころの美を説いたのであ
 る。宵衣肝食、萬機に忙殺され給うた大帝の襟度、欽仰すべきではないか。十萬首に上る御製
 も、此の忙中閑時の産物である。「司人云々」は、大臣達の捧ぐる政務上の文書のこころ。

反 省 三 首

己が身は省みずしてともすれば人の上のみいふ世なりけり

これは 天皇或る日の御述懐である。目糞鼻糞を笑ひ、己が目にある梁を知らずして、人の
 塵を笑ふが人の世の常である。反省の必要な所以を教へ給うた御製である。

わが心われとをりく省みよしらずしらずも迷ふことあり

これも「折にふれて」の御述懐である。親がわるい。兄がわるい。人の上のみいふれども、折々はわれもわが身を深く反省して見よ、知らず知らず自分の方が過つて居り、迷に陥つてゐる。こゝもあるものだ。こゝ穩かに訓へ給うてある。

世の中を思ふたびに思ふかなわが過のありやいかにと

これは、天皇御政治上の御反省である。維れ文維れ武、さながらの現神にてましますわが明治大帝だに猶且つ然り、ましてわれは、會子の所謂「日に三省」すべきである。「世の中を思ふたびに」は、世の中のことを思つて見るこゝ、いろ／＼心に合はぬ事が多い、それ等の事を思ふたびに……である。下の「思ふかな」は、わが身に反省して見るこのこゝろ。

努 力 五 首

器には従ひながらいはがねもとほすは水の力なりけり

清新にして道健。いはゆる丈あり、幅あり、力あるの御作。何等の絶唱ぞ、何等の高調ぞ。ただ、讃嘆の外はない。

「眞の服従は眞の自由である」この語は、「うつには従ひながら」に宣ひし句の註脚に外ならぬ。従順・服従・守操・節制の諸徳を意味した靜的勇氣である。「岩が根も徹す」は、勇敢・剛毅・忍苦・果斷・勇猛精進等の諸徳を意味した動的大活動である。

大にしては國憲國法より、小にしては校規團則の末に至るまで、又は父母の命令、師長の命令なき、守るべく服従すべき道に對しては、恰も水の方圓の器に従ふが如く、おこなしく遵守する従順の子、而も、其の爲すこと務むべきことに當つては、岩が根を徹す大努力を以て、之を大成せずんば止まざるの意氣、蓋し天下の大男兒たるを失はぬ。大帝は、かゝる従順、かゝる勇猛精進を、われ等に望ませられて、さてこそこの御歌になつたものご拜察し奉る。

冬ふかき池の中にもほとばしる水ひとすぢは氷らざりけり

これ亦世稀に觀るの大作である。「ほとばしる水」は、新陳代謝の大活動を意味する。逆つ

て活動する水は、冬深い嚴寒でも、決して氷りはせぬ。「流水腐らず」。「戸樞蝕まず」。人間大活動の前には、天下何者が遮り得るものぞ。たゞ勇猛精進あるのみ。不斷の大努力あるのみ。

大空おほぞらに聳たかえて見ゆる高嶺たかねにも登ればのぼる道はありけり

これ亦天下の大作。「登れば登る」は、登つて見ようと思ふ意志だにあらばの意。精神一到何事か成らざらむだ。たゞ爲さざるに由る。爲さば必ず成る。斷じて行へば鬼神も之を避くるではないか。躊躇する勿れ、逡巡する勿れ、天下豈われを遮るアルプスあらんやである。

難しとて思ひたゆまば何事もなることはあらし人の世の中

難しとて思ひ撓まば、實に天下何事も成ることはあるまい。艱苦は天の試練である。苦勞は買うてもせよだ。來れ千辛萬苦。寄せよ狂瀾怒濤。限りある身のためさんかな。引込思案、優柔不斷、そは愚人の字書にある語だ。躍進！躍進！大躍進！！水火をも辭すべからず。かくしてそこに名譽の殿堂、凱歌の星座はある。

むらぎもの心たゆまず進みなば嶮あかしき山も越えざらめやは

「思ふ念力岩をも通す」。屈せず撓まず努力邁進したならば、如何なる嶮山も突破して、成功の第一峯に立つことが出来る。「むらぎもの」は、心の枕詞。「心たゆまず」は、屈せず撓まずである。「越えざらめやは」のやはは反語で、越え得ざることは無い、必ず越え得るの意である。

親

一首

老の坂こえぬる子をもをさなしと思ふや親の心なるらむ

老の坂を越えて、五十も六十もになった子に對してだに、尙ほ昔のまゝに幼しと思つて、食ひ過ぎぬやうに、風をひかぬやうに、怪我せぬやうに、心配するが親の真情である。この御意である。此の御製は、上の句を、「ひみり立つ身となりし子を」と、世間には流布されてゐるが、後に御訂正になつたものと思はれる。今宮内省藏版に従ふ。

申すも畏かしけれが、此の御製、調こいひ、内容こいひ、實に千古の絶唱である。山上憶良の

しろかねも黄金も玉も何せんにまされる寶子にしかめやも
の如き、平兼輔が

人の親の心は闇にあらねぎも子を思ふ道に惑ひぬるかな
の如き、紀貫之の

世の中に思あれぎも子を思ふ思にまさる思なきかな
の如き、萬葉作者しらすの

旅人の宿りせん野に霜ふらば我が子はぐくめ天の鶴むら

の如き、何れも代表的名吟ではあるが、この高雅深遠にして、常人の思ひ至らぬ親の極愛熱愛・自然愛を歌ひ給うた御製には、到底及ばない。實に宇宙間第一の歌に感激し奉る。

子

三首

たらちねの親に事へてまめなるが人の誠の始なりけり

「まごころ」は真心、至誠である。人の至誠が行に現はれたのが徳で、此の至誠を以て君に仕ふれ

ば忠、親に事ふれば孝、夫婦には和となり、兄弟には友となり、朋友には信となり。親子は人倫の始め、至誠を以て事ふるは、まづ親に始まる。孝は百行の本である。此の意を詠み給うたものも拜察する。「たらちねの」は、親の枕詞。「まめ」は、まごころ、忠實、深切。

たらちねの親の教をまもる子は學びの道も惑はざらむ

里諺に「親の意見ミ茄子の花は千に一つも徒はない」とある。實際親の教訓、親の意見に仇はないから、之をよく守つて身を律する子は、學びの道を踏み迷ふことは決して無い。尊き御垂訓である。

たらちねの親の心をなぐさめよ國につとむる暇ある日は

是は、身のほごくに獨立して、國家社會の爲に働くやうになつた成人への御垂訓である。こかく成人になれば、親を敬遠し疎んじ、妻なき迎ふれば、此の傾向が一層甚しくなる。頼山陽が母を奉じて吉野の花を賞し、丹波の孝子蘆田爲助夫妻が、老母を車に乗せ、前から挽き後から推して雪見に伴せるが如き、實に紳士の學ぶべき行である。

兄弟 一首

並び立つ丈は等しく見えながらこのかみは猶このかみにして

「このかみ」は、兄弟のこゝこ。又年長者のこゝこ。「並び立つ丈は等しく云々」こ詠み出で給ひし所、奇想天外より來るの感がある。畏れ多けれども、兄弟を詠める古來百千の和歌中、未だ曾つて見ぬ大作である。

長を長とし、尊を尊とするは、社會秩序の基調である。而して此の長幼の序は、實に兄弟間の訓練より始まる。如何に身體は等しく見えても、或は大きくても、或は位貴くとも、兄弟は猶ほ兄弟である。何處までも兄弟として敬事すべきが人間の道である。此の禮、家に失へば一家亂れ、此の禮、國に失へば一國の秩序は亂れる。

學校生活に於ける高低の年級を指導し、長幼序禮の訓練をなすこゝこは、現下の惡平等、惡デモクラシーの思想に對する最も大切な對症方法だと思ふ。然るに世には階級の聲に怯えて、却つて之を抑止し撤廢するものさへある。思はざるの甚しきものだ。

友

二一首

諸共にたすけ交してむつびあふ友ぞ世にたつ力なるべき

「むつびあふ」は、睦び合ふ。「世にたつ」は、世に立つて仕事をする上に、力となるこの意。「二人心を同うすれば其の利きこゝ金を斷つ」こ易に在る。管仲鮑叔の交の如き、人間出世の本であり、一生の力である。

過をいさめかはしてしたしむが誠の友のこゝろなるらむ

「善を責むるは朋友の道なり」。御互過を諫めつ、諫められつ、切磋琢磨の功を積むが、誠の友心の友の眞情であるこの御意。

昭憲皇太后の御歌にも

誠もてまじらふ友はなかくにはらからよりもしたしまれけり
こある。いづれも尊い御歌である。

敬 老 二 首

年たかき人に授くる盃は手に取るごとに嬉れしかりけり

敬老尙齒の御思召おぼせつしから九十以上の老人に御盃を賜はる。此の御製は、その時の御心持を歌ひ給うたものご拜察する。「ごし高き人」は、高齢者。高齢の人に授くる盃は手に取る毎に嬉しい。ご仰せられた大御心、如何に老人をいたはり給ふか、一首の上に横溢してゐる。

をさな子にひとしくなれる老人をおいひで勞ることをゆるがせにすな

老人は、心もかららだも衰へて、實際子供のやうである。よろしくいたはり慰めて、露、ゆるがせにすなこの御訓おんをしへである。老人は過去に於ける功勞者ゆる、之を敬し、之を勞いたはるは、美しい人の行である。

幼 兒 三 首

いつはりの世をまだ知らぬ幼子をさなこが心やきよき限なるらむ

「人の性本善よき」。眞に偽の世をまだ知らぬ幼子の心は、天真爛漫神の如くである。而もそれがだん／＼長ずるに従ひ、いつはり多き世の感化を受けて、知らず識らず、不正・不義・不善に陥るに至るのである。「子供は佛」の美ご相俟つて、清き美しき御歌である。

いはけなく遊ぶ子供のさま見ればわれも幼くなる心地して

「いはけなく」は、無邪氣で、あざけなきこと。一誦三嘆を禁ぜざるの御高作、清高玄妙、神の御苑ゑんにでも逍遙するかの心地がする。「われもをさなくなるこゝちして」の御聲みこゑ、全くこれ天來の靈曲、鏘然たかなとして琴線の高鳴るを禁ぜぬ。孟子曰く「大人おとなは赤子の心を失はざるもの也」云々。此の言、畏れながらわが 大帝を申し奉れるものか。

母が手にひかれて歩むらなるごのたち止りてはすみれ藁つむなり

慈母あはれご、うなる子ご、春の野ご、藁ご。正に是れ一幅天使の活圖畫。「たちこまりては藁つむな

り。文字の美、小兒の美、動作の美、天下の貴も富も、なほ如かずである。日本一の畫工をして之を描かして置きたく思ふ。

生物愛護 六首

久しくもわが飼ふ馬の老いゆくが惜しきは人に變らざりけり

愛、禽獸に及ぶ深仁深慈なる 大帝の大御心の象徴として、感激に堪へないものである。あはれ、年久しく飼ひし愛馬の老い行くを惜しくあはれと思ふは、人にかはらぬこの大御心、豈尊からずや。

夕日影かげろふ待ちて鞍おかむ駒も暑さに弱りもぞする

駒も暑さに弱るだらうから、夕日影の光が薄れて涼しくなつてから、愛馬に鞍おいて、遠乗でもしようこの御仰せ。格調の上から申しても、内容から申しても、實に申分のない古今の名吟を拜誦する。「かけろふ」は、光が消えて陰になること。

籠の内に囀づる鳥の聲きけば放たまほしく思ひなりぬる

「放たまほしく思ひなりぬる」この御言葉、何たる美しい御仁慈の御心ぞや。齊の宣王が「羊を以て牛に易へよ」この昔も思ひ出されて、感じを深し。

ところせきふせこの内に鳴く蟲は選ばれたるや恨なるらむ

是亦微々たる蟲の上をあはれみ給うての御製である。「ところせきふせ」は、狭い小さい伏せ籠である。人にも此の類が多い。

すむ魚もいぶせかるらむ池水の浮藻しげりて梅雨のふる

これは、魚に對する御同情である。池一面に浮藻が生ひ茂つた上に、毎日梅雨がふつて、氣もめいるやうであるが、そこに住んでる魚等は、さぞかし鬱陶しくあるであらう。愛を魚の上になまで及ぼし給うた尊い御歌である。

おり立ちてとく打ち拂へ枝よわき小松の上に雪のつもれる

禽獸蟲魚に對する御仁慈は、更に非情な草木にまでも及ばせ給ふ。枝よわき小松のうへに、雪のふり積れるを御覽じて、疾く下りて彼の雪を打ち拂へ、枝よわい小松は可哀相である。侍臣に命じ給ふの狀、目に見えるやうで、畏しきも畏し。

教 育 七 首

いさがある人を教の親にしておほしたてなむ大和撫子

立派な人格者を得て、教育の重任に當らせたいこの御希望である。「やまこなでしこ」は、日本の少年・青年にたまへ給ふ。「おほしたつ」は、養ひ立つ、教育し立つ。「いさがある人」は、名譽ある人、立派な人格者、人の儀表たるに足る功勳ある人。「教の親」は、校長、教師。

天皇の教育に御熱心であらせられたこは、今更申すまでもないが、此の御製を拜し、冷汗背に浴く、恐懼にたへぬ。

わけのぼる道のしるしとなる松は位なくても敬はれけり

教育者は、人爵の人にあらず、天爵の人である。大に自重して國民教育の大任に當つてくれよ、御激勵の御言葉である。「道のしるしなる松」は、道しるべきなる松。即ち人の儀表であり、木鐸者であり、指南車である教育者にたまへ給うたのである。「位なくても」は、秦の始皇帝が松に大夫といふ五位の位を授けたといふ故事を思ひ出し給うて、たまひさやうな位はなくても自然に世人から敬はれる。實に神聖な高貴な職務であるこの大御心。我等教育者たるもの、徒に自卑し自棄して可ならむやである。

正しくも生ひ茂らせよ教へ草をとこをみな道の道をわかちて

この御製は、男女の道を正しく分けて教育せよこの御教訓で、現代教育上最も注意すべき思想的な重要問題であると思ふ。特に男もつかず、女もつかぬ外國かぶれの所謂モダンの徒の、大に猛省すべき頂門の一針である。

人としての人格に於ては、男女も勿論平等である。されど、精神上・肉體上、男には男の適性があり、女には女の適性がある。其の適性に随つて、自然に男女の天職が定まり、男女の道に區分がついて来る。然るに現下、此の男女の道が、漸次混亂しつゝあるは、實に悲しむべき國情ではないか。

わが國、神ながらの道は、男女平等で、同時に夫唱婦隨である。即ち人間として、又は國家社會の一員としての男女は平等である。たゞへば、天照大御神の女性を以て高天原を知しめし、天鈿女命・天石凝姥命が女性を以て天孫隨伴中の五伴緒中に列したるが如き、その例はいくらもある。

されど、夫婦となつて一家の人となつた以上は、夫唱婦隨でなくてはならぬ。その時は男女ではない、名さへ夫婦である。禮記に曰く、「天に二日無く、地に二王無く、家に二主なし」と。是れ東西古今變ることなき萬古不磨の天則であつて、亦人類社會當然の秩序律である。市長と助役は社會人としては平等の人格だ。されど、市といふ一つのサークルに在つて、自らの自由意志で進んで助役となつた以上は、市長を助け市長に隨はなければ一市は治まらない。社員が其の社

長に於ける、教師が其の校長に於ける、臣民が君主に於ける、皆唱と隨とでなくてはならない。この事は、諾・冊の尊が男女の道を行はせらるゝ、左旋右旋の神事にてわかる。而も世の學者は、文學士次田某、文學士木宮某の如き、是を以て男尊女卑の風習といふ。愚も亦憐むべしだ。わが皇道に男尊女卑の風は斷じて無い。あるのは皆外國傳來の思想である。男女といふ名は、社會的・國家的の名で、夫婦といふ名は家族的の名である。家族生活にあつては夫唱婦隨。國家社會の生活にあつては男女平等。これがわが國惟神の道である。

よき種をえらびくゝて教へ草うゑひろめなむ野にも山にも

「よき種」は、よい教材、即ち日本國民養成上のよい教材、よい教科書。「教草」は上を承けて選んだ上にも選んで教へ授けたい。こいふ意、教草即ち兒童・生徒・學生こいふ意、二つを含む。「植ゑひろめなむ云々」は、明治五年八月二日、學制頒布の時、仰せ出された書に「邑ニ不學ノ戸ナク家ニ不學ノ人ナカラシメンコトヲ期ス」、こ宣ひしは是である。

わがしれる野にも山にも繁らせよ神ながらなる道教へ草

「わがしれる」は、天皇の知しめす國中いふ意で、朝鮮・臺灣・樺太等の新領土をも廣く指し給ふ。「神ながらなる道」は、惟神の道で、神意のまゝの道。私心私慾のまじらない、又外來思想の混入せざる我が國固有の道。「道をしへ草」は、神ながらなる道を教ふるこいふ意で、教へ草の兩方に懸けてある語。新領土に於ける教育者諸君の行くべき道は、自ら明瞭である。

新高の山より奥にいつの日か移し植うべきわが教へ草

臺灣島の教育、特に蕃地教育に御軫念給ひての御製を拜察する。「わが教へ草」は、日本人的國民教育を施した兒童學生を、新高山の奥までも移し植うたいこの御希望である。

教ある庭にさきたる撫子の花は露にも亂れざりけり

「賢母の下には賢子あり」。教や躰の行届いた家庭に育つた子弟は、行儀作法もよく、人品骨柄も何ごなくけ高くて、露の重きにも亂れず、雪の威にも屈せず、又事にあたつて、心を惑はし、徳を汚すやうなごこは無い。御製の意は是である。高雅幽遠、風誦三四するに足る。

學問 九首

事しげき世にたぬまに人は皆學びの道に勵めとぞ思ふ

「事繁き世に立たぬ間」は、職に就き、家を持ち、世の中の繁多な仕事にたづさはらぬ前、即ち少年・青年の間のごこ。まごこ、青少年の間でなくては、十分な學問勉強は出来ない。「時に及んでまさに勉強すべし、歲月は人を待たず」。「少年老い易く學成り難し、一寸の光陰輕んすべからず」。心すべきごこである。

こゝろざす方を定めてみな人の世にたつ道に惑はざらなむ

是は、目的を立つるの必要を訓へ給うたのである。目的なきものは、轡なき馬、舵なき船の如く、東西にさ迷ひ、南北に漂うて、到底彼岸に達するごこは出来ない。故に學を爲すには、先づ第一に目的を定めねばならぬ。目的を定むには、能力・體力・資力、及び己が嗜好己が適性の如何いふごこを考量して定むるごこが大切であるが、なるだけ志を遠大にし、天下第一等の人物たら

むこを以て目標とするこが肝要である。「志す方」は、即ち目的で、「世に立つ道」は、將來の職業。即ち立身出世の道である。

半ばにて休らふことのなくもがな學の道のわけ難しとて

折角目的を立て、學に就きながら、到底踏み分け難い遂げ難いまで、半途にして挫折し廢學し、千仞の功を一簣いっさいに缺くやうなこがあつてはならぬと、堅く誠め給うたのである。孟母斷機の教、以て見るべし。「無くもがな」は、無くて欲しいの意。

楨柱まきはしらたてし心をうごかすな世には嵐の吹きすさぶとも

雄渾な大作である。かく半途に挫折し廢學するは、實に學者第一の罪惡であるから、一旦目的を立てた以上は、如何に嵐の吹き荒ぶあはぶこも、如何に狂瀾怒濤の逆巻さかまき來るこも、決して心を動かすこなく、勇猛精進、自彊息まず、以て之を貫徹せよ、この有り難き御仰せである。「楨柱」は、立つの枕詞。

世の中の人におくれをとりぬべし進まむ時に進まざりせば

進まん時に進まず、時に及んで勉強せざれば、一生進人に後れを取るぞ、この御誠。

朝のまにもあさなの學ばせよあさな幼子もひるは暑さに倦みはてぬべし

夏は、朝の涼しい間に勉強させよ、如何に子供でも、日中は暑さに堪へぬであらうと、吾等教師や家庭の人々に訓へ給うた御製である。御細心のほご感すべきである。

秋の夜の長くなるこそたのしけれ見るあき卷々のかさ數をつくして

天下の御政務に御寸暇ごすんげあだもあられず、こもすれば、御讀書も御意みこころのま、ならざりし 明治天皇が、秋の夜の長くなるのを樂ませ給ひ、夜の更くるをも知らで、讀書に耽り給ふの御實狀、實に見るが如く、畏おそしこも畏おそし。「燈火正に親しむべし」。我等學徒たるもの、奮勵せずして可ならむやである。

物學ぶ道にたつ子よ怠にまされる仇はなしと知らなむ

怠惰は眞に大敵。深く誠め給うたのである。「知らなむ」は、十分自覺せよこの御意。

いち早く進まむよりも怠るな學びの道にたてるわらはべ

進むに速かなる者は、退くことも亦速かである。たゞひ遅くも時計の針の如く、休まず、怠らず、着々進めこの御誠。易に曰く、「天行健、君子以て自強息まず」。兎も龜もこの昔嘶なき、思ひ合はずべし。

學 習 三 首

よりそはむ隙はなくとも文机の上には塵をすゑずもあらなむ

學校生活を卒へ、社會に出でて活動する世の青年・處女・並に我々成人等に向つて、學問修養の大切なことを訓へ給うたまことに有り難い大御心である。

一首の意は、各自業務に追はれて、机に向ふ隙は無くとも、せめて机の上だけには塵を据ゑないやうに、綺麗に掃除し整頓しておいて欲しいものである。至極内輪に仰せられたのである。御互聖諭を奉體し、寸暇を偷んで讀書したいものである。

おのが身を修むる道は學ばなむしづがなりはひ暇なくとも

これは、主として地方にある男女青年及び成人達に向つて學問修養の大切なことを御諭しになつた御製かミ拜察する。「おのが身を修むる道」は、即ち教育勅語を主とした學問修養。「しづがなりはひ」は、百姓・商人・職人・労働者なきの生業である。さういふ生業の爲に、たゞひ隙はないにしても、おのが身を修むる學問修養の道だけは、學ぶやうに留意して欲しいこの御希望。地方の男女青年たちの暇のないには大に同情するが、願くは志氣を鼓舞し、晴耕雨讀、三餘の勤學なき、切に祈る。

空蟬の世のことわざは繁くとも物學ぶまのなかるべしやは

「空蟬」は世の枕詞。「なかるべしやは」は、ないこことがあらうか、無い筈はないこ反る語。前二首は、「隙は無くも」。「暇なくも」。「至極内輪まごちに仰せ給うてあるが、こゝには隙の無い筈はない。隙を見付けて勉強せよ、強く仰せられてある。

前に言つた三餘さんよいふは、夜、雨の日、それから冬の農閑期のこことである。此の三餘は田園青年修養の黄金期であるが、此の外、平素に於ても、爲さんと思ふ志だにあれば、隙はいくらも見出し得る。二宮金次郎のあの勤學の態度なき思つて、大に奮勵努力すべきである。

人材登庸 二首

山のおく島の果はてまで尋ね見む世に知られざる人もありやと

官武くわんぶ一途庶民ニ至ルマデ各々其ノ志ヲ遂ゲ人心ヲシテ倦マザラシメンコトヲ要ス

こは、明治維新の御誓文である。四民は平等に皇化に霑ひ、人材は普く登庸せられて野に遺賢なし。いふ聖代であるにも拘はらず、尙ほ才あり徳あるの人にして、世に埋れて知られざるものはなきや、山の奥、島の果はてまでも、尋ねて見むこの御思召。如何に 大帝が、廣く人材を登庸して、

適材適所の善政を布かんの御志切なりしかが伺はれて、忝かたじけない次第である。山の奥、島の果はていふ御言葉に、深い意義があるを拜察し奉る。

埋木うもれぎを見るにつけても思ふかな沈めるまゝの人もありやと

この御製も、前と同じく人材登庸に就ての大御心おんごころを拜察し奉る。當路の君子、願くは、徒らに學閥・財閥・政黨閥等に偏するこことなく、人物本位の社會正義に立脚して、至公至平、廣く人材を拔擢登庸して、國務の進展を計つて貰ひたい。若し現今の如くにして推移せんか、思想は益々惡化し、人心は倍々倦み疲れて、國家の前途憂ふべきものがある。切に猛省を望む。

大臣以下の人々へ 五首

世の中の人の司つかさとなる人の身のおこなひよ正しからなむ

これは、總理大臣以下百官有司、市町村長、各種團體長等に下し給うた御垂訓である。「人の司」は、人の上に立つ人。

凡そ世の中の人の司配者になつて人の上に立つ人は、己が行を正しくし、自ら身を以て人を率ゐるの概がなくてはならない。「上の好む所下これより甚しきものあり」。上濁つて下清むの理なし。有司の人々よ、願くは行を正しくして、衆に範を示して呉れこの御希望である。

伊尹は、湯の名宰相であつた。曰く、「予は夫れ民の先覺者也。予將に斯の道を以て、斯の民を覺まさんとする也。予が之を覺すに非ずして誰ぞや」と。孟子、伊尹を謂つて曰く、「天下の民、匹夫匹婦だも、堯舜の澤を被らざる者あらば、已推して之を溝中に内るゝが如く思へり。其の自ら任ずるに、天下の重きを以てするこゝに、此の如し」と。堂上の諸君子、以て如何となす。

位ある身をわすれてや池の面の鷺は葦間の魚ねらふらむ

「位ある身を忘れて」は、五位鷺のこゝにである。無限の寓意諷刺がある。葦は惡しに通ずる。ねらふ葦間の魚は何であらう。近者頻々としてよからぬ報道をきく。卿等は、此等の御製を拜誦して何ご感ずる。願くは世道人心の爲、再考三思して貰ひたい。

縣守こゝろにかけよしづがやの竈の煙立つや立たずや

是は、縣守即ち府縣知事への御警告で、「かまごの煙立つや立たずや」と、堂々問ひ懸け給つた所、風發り雲湧くの感がある。一道三府四十三縣、乃至植民地に於ける地方官の人々よ、卿等の一舉一動・一勤一怠は、直に府縣民の休戚に關し、民風の作否に關係するこゝに實に多大である。願くは 大帝の心を以て心こし、日夕府縣民の上に意を注ぎ、直き、淨き、明き政治を行ふべく努力ありたいと思ふ。

むらぎもの心つくして縣守あをひと草をおほしたてなむ

是も地方牧民官に對しての御述懐である。「むらぎもの」は、心の枕詞。「青人草」は蒼生で、人民のこゝに。「おほし立つ」は、養ひ立つ、撫で育つ。「なむ」は希望の詞。即ち心の限り盡して、汝の治下の人民を養ひ立て、くれこの御思召。

しづが上に心をとめて縣守たづきなき身をいつくしまなむ

是も同じく府縣知事への御希望である。「たつきなき身」は、便りなき身。即ち裸寡孤獨の便りなき人々の上に心をこめて、慈くしめよこの大御心である。

家 長 二 首

眞木柱たち榮ゆるも動きなき家の主のあればなりけり

「眞木柱云々」。眞木柱の礎堅く一家が立ち榮ゆるの意。「動きなき家の主人」は、しつかりこして物事に動ぜぬ立派な家長。眞木柱、たち、動きなき、いづれも修辭上の縁語。

「千生りや蔓一筋の心から」。家長の心一つで、一家の盛衰興亡が分る。ここに家長は、上祖先に維ぎ、下子孫に繋る。家長の責任亦大なるかなである。

かりそめの事に心をうごかすな家の柱と立てらるゝ身は

これも家長に對しての御訓である。「かりそめ」は些細である。家の大黒柱に立てらるゝ身は、些細なことに心を動かしてはならぬ。家長既に心を動せば、一家亦不安に襲はれる。故に細心にして勇氣があり、沈着にして果斷があり、きつしりこして、物事に動ぜぬ修養が第一である。「立ち寄らば大木の蔭」。頼み甲斐ある親であり、家長でありたい。

學 生 三 首

おこたらず學びおほせて古の人にはぢざる人とならなむ

「學生」こいふ題にて詠み給へる歌。躍進・躍進・大躍進！ 脇目もふらず奮勵努力して、各自其の目的を達成し、以て昔の英雄偉人にも劣らない立派な人になつて呉れ。この御希望である。我が國の寶である満天下の學生諸君、願くは 大聖帝の御寄託のまに／＼奮闘し、以て他日奉答する所あらむことを。「學びおほせて」は、學び終へて、成し遂げての意。

世の中の風に心をさわがすな學びの窓にこもるわらべは

是も「學生」にいふ題にて詠み給へる御製である。學生は學窓にあつて專念學にいそむべきものであるのに、而もその本分を忘れて、社會的問題なきに心を動かし、又は實際運動等に狂奔するが如きは、實に大なる心得違ひであるぞよ。こ深く誠め給うたのである。

開くれば開くるまゝに思ふかなあらぬ道にや人の入らむと

「あらぬ道」は、異端の道、日本精神に反せる思想。大帝の御軫念のほごも拜察されて、誠に恐懼に堪へない。世の學生諸君。須らく猛省して、彼の悲しむべき一部學生の徒に惑はさるゝこと勿れ。

卒業生 二首

今はとて學のみちに怠るなゆるしの文をえたるわらはへ

是は卒業生に賜へる歌。「ゆるしの文」は、卒業證書である。人間の教育は、一生を通じて爲さるべきものである。然るに世には、卒業證書だに得れば、是で我が能事畢れり爲し、書物は開

上に束ねて復た顧みないものが多い。此の御製は、是等の徒を誠め給うたものである。

ゆるされて學びの窓をいづる子よ思はぬ道にふみな迷ひそ

世話・教護の行届いた學窓を離れて、荒波逆巻く世の中に出て行く卒業生の上を思ひやり給うて、御詠みになつた御製かと思ふ。「思はぬ道に踏みな迷ひそ」の御言葉、深く肝に銘して欲しいものである。「な迷ひそ」のなは勿れ。そは其れ。迷ふこと勿れそれ、こいふ意。

海外發展 二首

限なき天つみそらはあしたづの翅を伸るところなりけり

海外雄飛の大意氣、大氣魄を鼓舞し給うた御製かこ拜察する。堂々たる大作だ。

天下幾十萬の青年よ、君等は彼の人口問題、食糧問題を如何にする。是れ未解決のまゝ、君等に殘された大問題である。而して之が解決の鍵は、只一つある。曰く海外發展是のみ。されど憂ふるを休めよ、北へ北へ、南へ南へ。天がわれ等に與へた新天地は、汝の鶴翼を擴げるに餘りに

廣大である。あゝ、人間到る處青山ありだ。椰子の茂れる木蔭、橄欖の花咲く野末、蠻女の舞歌聞くも、亦男兒の本懐ならずや。行け！行け！日本の青年！！

大空を心のまゝにとぶ鳥もやどるねぐらは忘れざるらむ

「鷺鳥は舊林を戀ひ、池魚は故淵を思ふ」。人間豈故郷を思はざらんや。たゞひ海外に渡航して、南洋王となり、南米王となつて大雄飛をなすことも、元の古巢を忘れてはならぬ。祖國日本を忘れてはならぬ。さりごとて又其の土の習慣・法律等に親します、頑固であつてもならぬ。要は、郷に在つては郷に従ひつゝ、東方日出づる方に向ひ、遙に伊勢の大廟を拜し、祖先の墳墓を拜するの心懸が第一である。畏れながら、この御心持を御詠みになつた御製かき拜察する。

故郷 七首

たらちねのみおやのまし、故郷の都はことに戀しかりけり

此の御製、天真爛漫、眞摯率直、洵になつかしき御歌である。世界の偉人大聖帝 明治天皇

も、かくは小兒の如く故郷を慕ひ給へるか。「みおやのまし、」の御言葉、殊に感深 侍る。

山城の都の空にてる月をおもひぞいづる秋のよなく

山城の都いかにと春秋の花に紅葉におもひやりつゝ

の御製の如き

故郷となりし都は萩の戸の花のさかりもさびしかるらむ

の如き、如何に 大帝が京都を慕ひ、舊居をなつかしみ給うたか。拜察するだに、恐懼に堪へない。京都の花を御覽せられては、

ふるさとの花のさかりを來て見れば鳴く鶯の聲もなつかし

喜び給ひ、京都を出で立たせ給はんとしては、

わた殿の下ゆく水の音きくもこよひ一夜となりけるかな

無限の惜情を寄せさせ給ふ。ある時は、

とほつ親の定めましつる山城のたひらの都永久にあらなむ

ミ。その愛着心の御深き、涙ぐましき程である。「胡馬は北風に依り、越鳥は南枝に集ふ」。故郷を思ふは生物の自然である。而して人に在りて、此の郷土愛なるものは、やがて國家愛の基調を爲すことを思ふ時、我等はそこに重大なる意義を見出さざるを得ないのである。如何なる英雄偉人も、其の郷土を慕ふこと恰も赤子が其の父母を慕ふが如く、故山に錦を飾るは、實に人間一生の榮である。

明治天皇の京都を慕ひ給ひし御心情は、實に此の如くである。今や、御偉靈故山に歸り、御生前、特に愛で給ひしに聞くなる桃山の靈地に、長へに神鎮りましますことゝなつた。我等幸に學に御陵下に在り、朝に彩雲たなびく靈山を仰ぎ、夕に聖訓のまに／＼切瑳するここを得るは、亦何たる光榮ぞや。自今倍々奮勵努力し、以て天壤無窮の皇運を扶翼しまつらむことを、茲に謹んで誓ひ奉る。

花とりぐ

ますらをに旗をさづけて祈るかな日本の本の名を輝すべく

これは「軍旗」といふ題にて詠ませ給うたもので、典雅高邁、眞に立派な帝王の御製である。「祈る」は、神に祈るこいふ意味ではなく、心に祈念し祈願するこいふほごの意かこ拜察する。

忠勇義烈なるわが陸海の將校下士卒達は、此の如き天皇の御寄託を汚がさず、日清日露の兩役、さては世界戦争なき、實によく日本魂の威力を發揮して、大日本帝國の名を廣く五世界に輝かすことを得た。願くは今後、ますます日本魂を砥礪鍊磨して、我が軍旗の名譽を、長へに世界に發揚すべく努力して貰ひたいものである。

萬代の國のしづめと大空に仰ぐは富士の高嶺なりけり

富士山を詠じた歌は、名高い赤人の長歌を始めとして、世々の歌人の歌なき幾千百なるを知らぬ。詩にも栗山・丈山・鳩巢・良齋の徒以下、是亦數ふるに暇がない。而も是等の多くは、いづれ

も山の高、山の大、山の靈、山の美、山の景を歌つたもので、「萬代鎮國の山」こいふ意を歌つたものは殆んど無い。天皇の構想、流石は王者の詠である。崇高靈活、風誦三嘆を禁ぜぬ。

事しあらば軍の道に立たむ身は野をも山をも踏み鳴らさなむ

是は青年學生に對して、運動御獎勵の爲、特に「運動」こいふ題にて詠ませ給うた御歌である。「事し有らば」は、有事の時、一旦緩急あるの時。一旦緩急あるの時は、戰場に立つべき身であるから、平素山野を踏破して身體を鍛練して貰ひたい。この御希望である。世の青年學生達よ、冀くは 大帝の大御心を心こして、日夕運動を勵み、武道を練り、以て强健な體軀を、立派な精神の持主となつて、將來世界に雄飛するの素地を作つて貰ひたいものである。

子わかれの松のしづくに袖ぬれて昔をしのぶ櫻井の里

「櫻井の里」こいふ題にて詠み給うただに忝なきに、「松のしづくに袖ぬれて」の御言葉、勿體ない程である。今、櫻井の里には、乃木大將の筆に成る「楠公父子訣別之處」の八大文字を刻せる一

大豊碑が建つてゐる。是は吾畏友齋藤弔花が至誠熱心の餘に成つたものである。弔花近者來り告げて曰く、今回更に東郷元帥の筆に成れる「子わかれの」御製を刻せる一大石碑を建てむ計畫である。かくて 明治大帝を中心に、陸の乃木、海の東郷と相並べて、明治、昭和の一大記念物たらしめんと欲す。美いかな君の擧や。楠公父子死して亦餘榮ありと謂ふべしだ。

うるはしくうね造りせる山畑になにの種をかしづはまくらむ

「農は國の大本」で、天祖天照大御神は御躬ら御田作らせ給ひ、世々の天皇、亦農を尊び農を勤め給うた。今上陛下が、宮城内に稻田を作り、御躬自ら刈り取らせ給うたに洩れ承るは、神ならなる勸農尊農の御精神である。大帝はいつの行幸にか、この御製を詠み出で給へる。美しく綺麗に畝を作つた山畑に、百姓が種を蒔くのを御目に留めさせられ、何の種か知らんと思ひ給ふなご、おなつかしくも亦欽仰に堪へない。叙景詩の上乗なるものである。

すなどりは子等に譲りて蘆の屋に網すく翁あはれ老いたり

この御製も、いつぞやの行幸に、目のあたり御覽遊ばしての御作か、拜察する。蘆の苫屋に獨りさびしく網をすきつゝある老翁に、無限の御同情を寄せ給ひたるの意、言外に溢れて忝なし。

幼子のおひ立つ見れば、老人は思ひのほか、に變はらざりけり

「老人は思ひのほか、にかはらざりけり」の御言葉。人の意表に出づ。實際三日見ぬ間に櫻かなで、子供の成長は驚くばかりである。それに比ぶれば、老人はさほご年はよらない。

しづのをが聲をま近く聞きて、けり畑つゞきなる野べに宿りて

大演習なきにて、行幸の折の實況にてやおはすべし、「賤の男が聲を間近く聞きてけり」の御言葉、帝王の御歌として、千萬無量の意義があるやうに思はれる。又如何に 大帝が嬉しく珍らしく聞き給ひしか、想ひやられて畏し。

いさみ立つ駒にくらおけ飛鳥山、そめ始めたるもみぢ見てこむ

これは、大帝三十二三歳の御時の御製であるが、「勇み立つ駒に鞍おけ」。「染め始めたる紅葉見て來む」なき、字々飛躍し、句々鳴動してゐる。逸氣奔放・雄姿颯爽たる 大帝の高風、以て想見するに足る。何等の雄調ぞ。

乗る駒に小草はませて、休へば鞍のうへ白く花ちりかゝる

繪にしたいほぎ、美しい御作である。時は、艷陽四月の天、所は、小金井清溪のほとり、水を夾むの櫻樹は、花雲十里、今や繚亂のまさかり。うらうらと霞む春野の末には、黛の如き遠山の浮ぶも見える。是等をバックにして、鐵蹄曼々、花塵を蹴立てつゝ、閑に歩ませ給ふ白馬金鞍上の御一人・後へには従ふ幾騎の殿上人、しばしにてはや、樹下に駒を休ませ、折からの落花に對して見入り給ふの風情、花は風なきに繽紛として、駒の立髪、雪降りかゝる。空には横ふ歸雁の一つら、日は將に暮れなんとして、いづこの寺の鐘ならむ、一杵又二杵。

受學
驗習
學生
參考
叢書

次目次編冊七十全

受學 驗習	受學 驗習	受學 驗習	受學 驗習	受學 驗習	受學 驗習	受學 驗習	受學 驗習	受學 驗習	受學 驗習
代	算	東	西	國	地	外	日	國	
		洋	洋		理	國	本		
		史	史	史	論	地	地		
數	術					理	理	語	
受學 驗習	受學 驗習	受學 驗習	受學 驗習	受學 驗習	受學 驗習	受學 驗習	受學 驗習	受學 驗習	受學 驗習
鑛	植	動	生	化	物	三	幾		
			理						
			衛						
物	物	物	生	學	理	角	何		

錢拾九金各價定
錢八金各料送

各卷・挿繪豊富・三六判各一冊

の徒生校學女等高に並校學範師校學中てしと主は書叢本
と用考參驗受の者驗受校學門專種各てせ併・しと用習學
!!著快きな憾遺てし

館文寶 ○八二京東替振 三町銀本區橋本市京東
三四阪穴替振 四通堀波阿區西市阪大

發行所

東京市日本橋區本銀町三 振替東京二八〇
大阪府四區阿波堀通り四 振替大阪四三

寶文館



製複許不

昭和五年十二月五日發行

明治天皇御製讀本與付

定價金二十錢

編著者 田中常憲

發行者 大葉久吉

東京市日本橋區本銀町三丁目十七番地

印刷者兼 柏佐一郎

大阪府四區阿波堀通り四丁目二十番地

神戸商業大學教授 竹原常太著 菊判千七百餘頁 上質印刷紙 函入
ドクトル・オブ・フィロソフィ 二段組六ポイント一頁百四十八行

スタンダード和英大辭典

第四十版

▲本書の七大大特色

現代英語の歸納的研究
標準譯語と出典明示
文例の豊富と正確簡潔
前後置詞活法新語豊富
英米語の別と實用語
最新最大最低廉價
本書發行の國際的意義

普及版 上製金拾圓 送料各
金六圓 特價八圓五拾錢 三拾錢

東京商大教授 福田徳三博士曰く……私は決心して一本を買
ひ求めました。幸に學生が一緒でしたから、重たい本をかつい
で宅へ歸りました。そして驚きました。私の座右には勿論……
も……も……皆あります。
較べて見て驚きました。……同時にあなたの本は一字一句あ
なた自らの非常の努力の費されてあるものなる事を發見致しま
した。驚異云ふ文字は、私があなたの本を見るまでは其の意
義が判然してゐませんでした。私は眞に驚異の念に打たれまし
た。……我々の専門方面でもこんな本が一冊欲しいのです。
……こんな本が二三十冊も出たら、日本の學界は頓に面目を
一新すると思ひます

館文寶

〇八二京東替振 三町銀本區橋本市京東
三四阪大替振 四通堀波阿區西市阪大

理學士 西澤勇志智・多田靜夫共著

増補 物理學精義

理學博士 龜高德平監修・多田靜夫著

増補 化學精義

菊判クローヌ製本
紙數七百餘頁
定價各冊參圓五十錢
送料各冊 二十四錢

本書は高等學校、専門學校入學受験準備及中等學校上級生の參
考書として、卓越せる内容を有すること世既に定評あり。今回
多大の増訂をなし版を改め面目を一新して、再び諸君に見ゆる
に至れり

本書の特色

要點急所を摺み切實に斯學の肯綮を指摘し最も理解記憶に便せしこ
こ ○計算問題解法、物理實驗等を詳説し、簡明最新の挿圖多數を
加へたること ○大正元年以降の各官公私高等専門學校入學試験問
題及重大問題を網羅し、之に懇切明快なる解答を附したること ○
連年入學者の告白せる如く實に本書一卷の精讀は優に受験パスの秘
鍵を確得す。兩書相俟つて受験界の双鍵たり。

館文寶

〇八二京東替振 三町銀本區橋本市京東
三四阪大替振 四通堀波阿區西市阪大

同	同	文學士坪内孝	東利作	林名村源次郎增	佐藤林泉藏	竺賢誠	今土井直人	後藤林泉藏
雨月物語詳解	花月草紙詳解	註徒然草	模範代數學問題集	最新補習代數學	最新分類代數重要問題	考へられる幾何問題集	整頓せる幾何の學習	最新分類平面幾何重要問題
・七〇	・七〇	・七〇	一〇〇	一・二〇	・六〇	一〇〇	二〇〇	・六〇
八	八	八	八	八	八	六	二	八

寶文館

〇八二京東替振 三町銀本區橋本市京東
三 四阪大替振 四通堀波阿區西市阪大

藤村作	幸田露伴	青木常雄	文學博士松村武雄 文學士後藤朝太郎	寶文館編輯所	長澤龜之助	長澤龜之助	早稻田前田定之介 大學教授	池田四郎次郎
掌中新辭典	掌中漢和新辭典	掌中英和辭典	學生英和辭典	最新式學生辭典	解法三角法辭典	解法算術辭典	和英商業通信辭典	故事熟語大辭典
			讀むにも 書くにも 便利な		同	増訂		縮大 刷版
特價 一・八九〇	特價 二・二五〇	特價 一・九〇〇	一・五〇	・九五	二・八〇	五・五〇	三・五〇	一〇〇〇 六〇〇〇
一〇	一〇	一〇	八	一〇	一八	二四	一二	二四 一八

寶文館

〇八二京東替振 三町銀本區橋本市京東
三 四阪大替振 四通堀波阿區西市阪大

片山口 泰次郎	鈴木芳松	田中 豊	住友彦太郎	住友彦太郎	同 フランク・ミューラ	小川 忠藏 <small>神戸商大専門部教授</small>	同	小久保定之助 <small>神戸商大専門部講師</small>
英文和譯の基礎	標準和文英譯法	現代小英文學選	ROE 圖式解 式創 英語研究の革新 (面白き單語の生れ方)	POINTS OF ENGLISH (和文英譯の急所)	和文英譯例解	高等和文英譯模範	英文 難句 千五百題集	英和會話寶鑑
								並上製
・九〇	一・三〇	一・五〇	特價 一・〇〇	特價 一・〇〇	・八〇	二・〇〇	・四〇	二・三〇 三・〇〇
六	六	一〇	六	六	六	一二	四	各一二
館 文 寶 <small>〇八二京東替振 三町銀本區橋本市京東 三 四阪穴替振 四通堀波阿區西市阪大</small>								

終

